

---

# 学校は空の上！？

神羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校は空の上！？

### 【Zマーク】

Z2621E

### 【作者名】

神羅

### 【あらすじ】

最近、無事に中学校を卒業、受験も合格してのんびりしていた主人公こと影月狼くん。だけどそこに彼の母親が来て狼くんを違う高校へ。その高校はなんと空に浮いていた。これは、そんな高校での彼の高校生活のお話です。

## ハルソード・プロローグ（前書き）

懲りずに書いてみました。よかつたら読んでください。お願いします。

## ハルソード・プロローグ

「待てええええええええ！後はーー！」

「嫌だ！」

えー…始めまして皆わん。俺は今とある先輩から逃げてます。おっと、自己紹介がまだだつた。

俺は影月狼。身長は140。昔色々あつてもう殆ど伸びない。童顔で色白。同年代の男子と比べると声も高いらしい。

趣味はアニメや漫画。特技は…あんまり人には言いたくない。

何でこんなことになつてゐるかといつと、…こんな事言つたら頭大丈夫か？とか聞かれそうだけど言おう。色々あつて空に浮いてる学校に行くことになつて色々あつて先輩に追われているんだ。

何？色々の部分が聞きたい？

まあいいや、教えてやるよ。それは昨日の事だった。

## ペソード1 高校勝手に決められた

俺はこの前中学校を無事に（猫被りがばれずに）卒業した。んで受験も合格したんだ。

それで学校が始まるまですげえ暇だったから昨日8時に寝ちゃったんだよ。

んで、昨日8時に寝た俺は、朝の3時半といつ微妙な時間に起きた。

「やっぱ暇だ……」

そう、暇だ。とても暇。

ピンポン。

インターフォンがなつた。  
誰だよこんな時間に。

「こんな時間に誰ですか？」

「久しぶりだな。息子よ」

「…お袋」

はあ…厄介な人が来たよ。

世界で凄く強い主婦のランキングに間違いなく三本指には入るであろう最強のお袋。

「何の用？」

「一つだけ伝えなきやならない事が有つてな」

「この人のことだ…。どうせろくな事じやないだろうな。

「今日の7時位に迎えが来る事になつていて。お前はそれについて行つてその学校に入る」となつていて。受験した高校の事は気にするな。連絡済だ」

「それは絶対なんだろ?」

「ああ、絶対だな。確定事項だ」

「うなつたら俺には止められない。そういう人なんだ、俺のお袋は。「なに、気にするな。とても良い学校だぞ。それでは私はこれで行くよ。ダーリンが待ってるからな」

「もう帰つてくれんな！」

約、四時間後。

お袋が言つたとおり、本当に何か来た。

「え？…とりあえず貴方誰ですか？」

「わしは校長じや。…ほれ、制服と登校に必要なブースターじや。これはかのミスターーサンが愛用したといわれるブースターじや「ブースターつて…学校どこにあるんですか？」

「空じや

「空ですか」

ああ…平凡な学園生活…さよなら。

出来れば普通に過ごしたかった…。

「それじやあそういう事で。明日入学式じやから8時までに準備を整えておくよに」

「8時までつすか。分かりました」

「7時50分には迎えに来るからな。それじやあまた明日」

「また明日」

…何者だつたんだ？あの校長。

本名名乗らないし、何も無いところから俺のブースター取り出してるし、ミスター タンとか軽く危ない発言してるし…。

ま、お袋の関係者にまともな人はいないからしようがないか。えーと、制服に皺が出来ないようハンガーにかけて、ブースターはまあ…テーブルの上にでも置いとくか…。

今日は日曜日。今の時間は8時1分前。

そろそろ奴が来る頃…。よし、窓を開けよう。

「うおおう！朝飯食いに来たぜえ！」

前もって開けておいた窓から箸とお椀を持って飛び込んでくる奴は、俺よりも一つ上の斎藤葉介さいとうようすけって人。一人暮らしで俺と同じくヲタク。だがかなり整った顔立ちで、女子には人気がある。身長は185位かな。羨ましいぜ葉兄、俺なんか140…。

何故朝飯を食いに来るかと云うと、彼曰く、『お前の家事スキルはA+級だからだ！』だそうだ。ちなみにこの人、窓を開けておかないと飛び蹴りで窓ぶち破つてまで侵入してくる。二回ほど窓をやられた為、俺はもう諦めて食わせることにしてる。

「はいはい…。ほら葉兄、ふりかけとインスタント味噌汁」

「わーい。今日はのりまだ。って違うつーおかず！手料理プリーズ！」

「面倒だから作つてない」

「何いいい！？」

「そういう事で。ほら、出口はあつちだよ」

「…そんな…俺は一体何を食べばいいんだ？つてあつちの部屋にある皿は何じゃあ！？」

「…ちつ」

「はいそこあ！あからさまに舌打ちするのは止めなさい！…ええい、朝から五月蠅い奴だ。

「…んお？何だ、お前も俺と同じ学校来んのか」

テーブルの上にあるブースターに気づき、言つて来た。

「え？葉兄も同じ学校なの？」

「おう。あそこは大変だぞ。楽しいけどな苦笑しながら俺に言つてくる。

「朝飯はまいいや。じゃ、俺は帰つてSPA BOOGやつてるわ。またなあ」

「うん、また」

さて、疲れる人はどうか行つたし。

とりあえず食材の買出しとシャーペンでも買いに行くか。

まずはシャーペン。実は俺の家を出てすぐ近くに商店街がある。面倒だからそこで適当なのを買おうと思つ。

さてさて、財布持つてレッツ買出し！

…と家を出てみたものの、良いシャーペンを求めてその辺をふらふらしてたらスタッフホールにチンピラAとかBとか、そんな感じで出でくる不良どもに囮まれちゃつた訳でして。

「…うつ、メンドくせえ…」

逃げる事も出来るけどこいつは奴に限つて『てめえ…あの時の…』とか言つてまた出て来るんだよなあ。ま、人目の無いところに行つたらお袋直伝、影月流の拳を食らわせてやるけども。

…あ、言つてなかつたな。俺の特技は影月流だ。もつ一つあるけど。

なーんて説明してる内に路地裏ですとも。

「おいガキ、金くれや。俺達今金欠ですよ」

「おとなしく出しゃ痛い目に遭わなくてすむぜえ？」

「つむせーよ。黙れバカ」

「ああ…？てめえ調子に乗んな！」

チンピラA…茶髪が殴りかかってきた。が、お袋の地獄の特訓により鍛えられた俺には当たつても大したダメージにはならんので当たつてやる。

こうすれば正当防衛が認められるから。

「ハッ。殴つたな？じゃあ殴られても文句は言えないよな？」

俺は一步で相手の懷に入り、相手の鳩尾に肘を入れる。

「…ぐ…」

Aは腹押されて蹲つている。

「一発でお終いかよ」

このやりとりを傍で見ていたB、C、Dは蹲つているAを拾つて逃

げていつた。

お、Aの財布見つけ。今日はこれでパートとやるか。

「ただいまつと」

Aの財布で大量の食材を買い込んだ俺は、昼過ぎに家に戻った。誰もいない家に向かつてただいまと言つのはもはや習慣となつているのでつっこまないで欲しい。

「おう、おけーりー」

何か居たあああ！

まあ、いいか。どうせ居ても葉兄だからな。

「で、何で居るの葉兄？」

「昼飯食いに来たら居なかつたからそのまま」こいでゲームしてた」「なるほど、とりあえず帰れ

「腹減つて動けません」

テレビの前でだらつと横になる葉兄。

「やうだ葉兄、聞きたい事あるんだけどいいかな？」

「おう。いいぜー」

「葉兄の時も校長来てブースター渡されたの？」

「ああ、そうだぞ。あの校長身体能力と成績がそれなりに良けりや不良だらうが強制連行してくるし。ま、あまりにも悪い奴らだつたら連れて来ないみたいだけど」

ふむふむ、要するに不良も居るのか。

なるほどなるほど…と考えてたらもう一言。

「それでも訳ありなら不良も連れてくるらしい。要するにあれだ、中身も見てから連れて来るか連れて来ないか決めてるんだよ」

「へえ…」

「ぶつちやけた話、そういう奴は殆どいねえけど」

「いないんかい」

やべえ、思わずつっこみじました。

「つはあ…、腹減つた…」

気がつけば晩飯の準備を始めるのに丁度いい時間になっていた。

「さあてと、今から晩飯作るかな。茶碗持つてきなよ葉兄」

「おっ? マジか? ジヤ、取つて来るとするか」

立ち上がり、窓から出て行つた。

「はあ…ま、葉兄が言つならそれなりにはいい学校なのかな」

ま、どうせ猫被つて三年間過ごすんだけどね。

さてと、今日の晩飯はすき焼きだ。

とりあえず何が起きてもいい様に体力だけはつけておこうと思つ。

## ヒュンード2 校舎は本拠地の上

「…………」

「…………」

朝か……。俺は皿をひつから開けて時計を見る。

現在、6時。

「うん、朝飯食わなくていいやー一度寝しよ。

皿覚ましを止め、素早くアラームを7時30分に設定しなおす。

よし、一度寝…

「うーうーあつい飯ー！」

出来なかつた。

「葉兄？」

「朝飯～まだか～？」

あーうるせー。

「朝飯は作らないよ」

俺は自室から出て直接葉兄に言った。

「またか……どうしたんだよ。最近飯作らないじやんか」「めんどい」

俺は財布から二千円を取り出す。

「ほり葉兄。コハユ一行つてらつしゃい」

「いや、いい。どうあえずほり、制服着ひ」「制服う？……ああ、あれね」

そう、今日は学校とやらの入学式らしい。

……迎えを寄越すつて言つてなかつたか？

「迎えて葉兄なの？」

「おー、昨日電話で明日狼を連れて来てくれつて言わされてな

制服をタンスから出して着る。

ダサくもないし凄くかつこいい訳でもない普通の制服だ。

「そのついでに朝飯を頂こうかな…」と思いまして

制服を着ながら気付いた。

葉兄の制服ちょっと違うなあって。

「ねえ葉兄。何で制服ちょっと違うの？」

「これか？学校行って校長の話聞けば分かるよ

「へえ…よし、着替えたよ」

「そうか。じゃ、早いけど行くか？」

「そうだね。このブースターにも慣れなきゃいけないし」

そして場所は変わつて家の裏庭。

「ブースターは背負うだけでいいんだ。で背負つたら右側のボタンを押す」

言われた通りにやつてみた。

あ、意外と軽い、これ。

「見ろ」

葉兄は手鏡を見せてくれた。

「え？何で映つてないの？」

「ステルス機能搭載だ。これで周りの人に気付かれずに登校できる。そして…」

「そ」そと葉兄もブースターを着用した。

「同じものを使つている人同士は見える。狼、外してみる」

言われるままにブースターを外した。その瞬間、

「うお！」

ふつ、と葉兄の体が見えなくなつた。

「着けてみ」

「おお」

今度はぱつと体が見えるようになった。

「そういうことだ。ちなみに、一回外すともう一度ボタンを押す必要あるからな。気をつける。本当はステルス状態でボタンを押すと

「飛びんだけど、まあジャンプすれば勝手に飛ぶんだよ。飛ぶ速さを  
変えたかつたら左にあるダイヤルをいじれば変える  
「なるほど」

「ちなみに、女子の場合はこれらの機能+スカートの中が他人に見えない、という機能が追加されている。さらにもう一つ、飛んでいる最中にあの～何つーの？噴射口？に触れても火傷しないという機能があるぞ」

「…凄いね」

「説明は終わりにしていくか」

「分かった。行こう」

葉兄がジャンプしてそのまま浮遊する。

それをまねして俺も飛んでみた。

「おお。飛んでる」

「後は真っ直ぐに立つとそのまま上昇、体を斜めに傾けたりすれば傾いた方向に向かって飛ぶから。…ってか慣れろ、行くぞ」

葉兄は俺をおいて一人で斜め上に飛んでいく。  
俺はそれを後ろから追いかけた。

最初の頃こそ姿勢制御とかでフラフラしてたけど慣れれば結構楽しいもんだ。

今は葉兄と並んで飛んでいる。

「何か葉兄の奴僕のと少し違わない？」

追いついて並んで飛行してたらふと気がついた。

「あーこれ？これも校長の話聞けば分かる

「へえ…。まあいいや。それより後どれ位で学校に着くの？」

「もうちょっとだな。そんなに早く行きたいのか？」

「折角だから色々見てみたいじゃん」

「よーし分かった。あんま動くなよお

俺の左側に接近してくる葉兄。

何してるんだ？

「あつたあつた。よつと…」

ん？なにやらカチカチと何かを回している音が…

『これより、高速飛行を開始する。

これより高速飛行を開始する。

モードチェンジ、開始』

機械音が…機械音が！ 一体何をしたあー！ 葉兄いいい！

ガキヨガキヨガキヨ

ガシーン

『ハイスピードモードへシフト完了』

キイイイイイ…ボツ！

うお…一気に加速した！

「葉兄！ 葉兄、止、め、ろおおおおおおー！」

「あつはははははー！」

下から葉兄も俺を追つてくる。…爆笑しながら。

くつそ。後で突き落としてやろうつか。

あー…、あまりの加速力で物凄いGが…。

ぶつちやけきつい。

「追ーいつーいた。今止めてやるぞー」

また後ろからカチカチいつてる。

ふう、助かつた。

ガチャガチャ

ガタン

## 『ノーマルモードへシフト完了』

「ふう…。葉兄い、あの事おじさんと言ひつけよ~。」

「じめん、ゆるちて」

「まあいいけどね」

「それより、今の加速のおかげでもう学校見えるぞ~。」

ほら、つて斜め前を指差す葉兄。

俺はその方向を見た。

「…大きさがおかしくないか？あれ」

そう、ありえない位でかい校門があつた。  
「気にすんな。ほら、さつとと行こうぜ」

「そうだね」

それからすくに校門近くには着いたけども、一つ忘れてることがあった。

それは、

「葉兄、どうやって着地すんの？」

着地の方法。

「体重を下に掛ければ降りられるぞー」

「分かった。やってみる」  
ゆっくりと下降し始めた。

おお、出来た。

「おし。じゃ俺は自分のクラスに行くわ。またなあ

葉兄は手を振りながら歩いて行つた。

俺も行くとしよう。

とりあえず真っ直ぐ行きや入り口があるかな。

よし、行くか。

ま…迷つた…

真っ直ぐ行けば入り口あるだろー、とかそんなノリで動くんじゃなかつた…

はあ、どうすつかなあ。

辺りを見回してみた。

お、右の方に誰かいるぞ。ちょっと聞いてみるか。

「すいませーん」

歩きながら声を掛けてみた。

「はい? どうかしましたか?」

こちらの方を向き、言つて来た。

…あれ? 何か聞き覚えのある声だな。

「私に何か用ですか?」

むこうも近づいてきた。

顔がハツキリと分かるくらいまで近づいて気付いた。

「もしかして…『先輩』?」

「何だ、『後輩』か。久しぶりだな、元氣か?」

彼女は夜波風菜。  
よなみふうな

腰辺りまで伸びた黒髪。可愛い、と言つよりも綺麗、と言つたほうがいい綺麗に整つた顔立ち。スタイル抜群。長身。成績優秀。運動神経抜群。

中学校時代、俺の猫被りを唯一見破つた人だ。

俺も先輩の猫被りを見破つたけどな。

「道に迷つたんです。教えてください、先輩」

「その言い方は似合わねえよ。どうせ他人はいないんだから普通に

話せ

「はいはい…。で、マジで迷ったんだけビビリ行きやいいんだ?それと、まだ猫被つてるのか?」

「後輩だつて猫被つているだろ。とりあえずついて来い。体育館に行くぞ」

俺を置いてさつさと歩き出す先輩。

うん、行動が早いのは変わつてないなあ。

少し歩くと、人がポツポツと道に現れ始めた。  
それすなわち、俺と先輩が猫被るということ…

「ところで先輩。何であんな所にいたんですか?」「私はちょっと早く学校に着いたから散歩してたの」「そうなんですか。それより先輩、この学校つて大きすぎだと思いませんか?」

「ふふふ。一週間もすれば慣れるわよ。

はい、ここが体育館。あそこの壁にクラス表と新入生のこの後の行動が掲示されているから、また後で会いましょう」

「ありがとうございました、先輩」

先輩は猫被つたまんまどつかへ行つた。  
俺もクラス確認して、さつさと行くか。

誰か知つてる奴いねーかなあ。  
とりあえず見てみるか。

一年一組 A・B

俺の名前は無し、と。

二組 A 無し。B 無し。

三組 A 無し。B …お、あつた。

知つてる奴誰もいねえなあ。  
ま、いいか。

俺は今後の予定を確認し、『自由にお取り下さいの所から地図を持つて、一年の校舎に向かった。

## ペソード3 先生はチョークを投げる

地図を見ながらのんびりと歩いて、五分くらいで自分のクラスに到着した。

「一年三組 B。ここか」

さて、どんな奴らがいるんだろうな。

俺は教室の中に入った。けど、まだ誰もいなかつた。ま、仕方ないか。まだ7時20分だし。

黒板に貼つてある座席表をでも見るか。

『早く来た人から好きな所に名前を書いてください。そこが貴方の席になります』

よし。窓際後ろの席でゆっくり待つとしよう。

五分後。

「誰も来ねえな」

まだ五分しか経つてないしな。

更に十五分後。

「Z Z Z ... Z Z Z ...」

【寝どるし！】

( は作者ジッコリです )

そして三分後。

「三組のB...ここか~」

「Z Z Z ... Z Z Z ...」

「誰かいないかな~。つて、いるけど寝てるー。」  
「うるせえな...けど猫被らなきや...」

「誰かは分かりませんが僕の睡眠の邪魔をしないでください...」

「おいつす！始めまして！」

「うわあ…俺の話聞いてちゃいねえ…。

つか、声聞いた感じじゃ女子だと思う。

俺は顔を上げてみた。

「あ、やつと見てくれた。始めまして、私は奈々村美咲。ななむらみさき宜しくね」  
テンション高けーなおい…。つーか結構可愛いと思つ。

「君の名前は？」

「僕の名前は狼。影月狼だよ。僕のほうこそ宜しく」とびつきりの笑顔（勿論作り笑いだ）で名乗つておく。猫被りは第一印象が大事なんだぞ。

「…う、うん。ねえ狼君」

何で顔赤いんだ？

「あの…席、隣で…いいかな？」

隣？何でわざわざ…。まだ空席はあるのに。

「ごめん。隣は男子がいいんだ」

その方が話が合うだろうしなあ。

「…そつかあ。まあいいや、じゃまた後でね狼君」

そう言って、奈々村は残念そうな顔でクラスから出て行つた。

「おや、先客がいたか。俺が一番だと思つてたのに」

すぐにもう一人来たし。今度は男か。

「俺は筒井つついけん見つて言うんだ。趣味は人間觀察だ。宜しく」

「影月狼だよ。宜しく」

オイオイ、趣味が人間觀察つてお前…。

「じゃ俺はお前の隣の席をいただく」

それから暫くは一人で世間話をして時間を潰していた。

キーン　コーン　カーン　コーン

「気がつけば他のクラスメートが来てるな」

予鈴が鳴つた今では、名前は知らんがクラスメート達がいっぱい

る。

「そりやあ初日から遅刻する人なんてそうはないよ」

「それもそうだな」

後、話を聞いて気付いた。見には猫被りを見破られてない事が。ふ、俺の猫被りも上手くなつたな…。

キンコーンカーンコーン

あ、本鈴だ。

ガラガラッ

「おーい、皆一席に座れー。これからHR始めるぞー」  
ホームルーム

俺はアイ・コンタクトを見に送った。

（ほめられ来るから後で謝るなこと教えて）

(何それ！？)

(俺の鍛え抜かれた)  
つづき

(へえ。まあいいや。じゃ、おやすみ)(了解)

「俺の名前は鮮血<sup>せんけつしゆく</sup> 深紅だ。一応この担任なんでも宜しく。ちなみに、俺の授業で寝てる奴、遅刻した奴、赤点取った奴は問答無用で俺のチョーク投げが炸裂するぞ。覚悟しておけ」

本当に投げんのか…。それに覚悟つてオイ…。

「先生、チョーク投げつて覚悟するほどの物でしたっけ？」  
「つて、初の俺視点か！ 皆さん、俺です、見ですよ！」

ナイスな質問だな、クラスメートN。

「この学校の教師になるにはチョーク投げが常人よりも強くなきや  
いけないんだ。んで、校内ランキングがあるんだが、俺はその中の  
四位だ。実力は… そうだな、遅刻してる奴がいるからそいつが来た  
ら… つてもう来たな」

と言うよりも狼、初日から遅刻してゐる奴いたぞ？

「よーし、入ついたら投げるからよーく見とけよー」

ガラガラッ！

一  
到  
着！

過ちしてんしゃれだ！ 呼んでおらあ！」

パン!

「ゴアツ！」

二二二

あいつ頭から抜け出でるよー。

「と、まあこんなもんだ。ちなみに、これはまだ全力じゃないからな。授業で寝た奴には全力のチョークが飛んでいくぞ、分かつたか

?

あれで全力じゃないのかい！？

「そんで、今こいじで気が失つてゐる馬鹿は……そつだな、筒井とか詫つ

の、お邊の邊に座りやどこでくれ

「あ：はい、分かりました」

めんどくさいなあ……仕方ない、運ぶか。

…ん？俺が動いたら狼が寝てんのバレんじゃね？

よし、移動完了っど。

「おーし、今後の予定を確認するぞー。この後はまず…何だあ？あいつ寝てるのか？つたく、しょうがねえなあ。ま、初回だしハ割くらいでいいか

あ～～～狼が餌食に～～～。

皆も先生のハ割（くらい）の力を見るためにめっちゃ見てるしなあ  
狼、ドンマイ！

「起きろやあああ！死ねえええ！」

卷之三

？河で龜の手こチヨリカガ

「おはよ見。何で僕はチョークを持つてるの?」

おしゃれシカゴ

「う、僕の、」

あらま、先生本当にチョーク投げするんだ。

「まあいい。話を進めるぞー」「

あの後、真紅先生の話でこの学校がいかに特殊なのが分かつた。

まず一つ目。

この学校はポイント制らしい。

主に学校行事で活躍、ランクの高いテストを受けて好成績を取る、後はまあ、アレだ。普段の生活態度が良いとポイントがも与えられるらしい。

で、そのポイントを使うと制服を改造できるようになつたり、ブースターを改造できるようになつたり、成績よく出来たり… その気になつてアホみたいに溜めれば飛び級も出来るとか。ま、他にも色々あるみたいだけど。

二つ目。

『報酬 制度』

どうにもポイントだけじゃ盛り上がりながらないらしいへ、その時の校長の気分によってイベントの上位何名かに報酬が出来るらしい。噂じや気分がいい時は最新式のパソコン三台とか液晶テレビとか出るみたい。

三つ目。

イベントはテスト、体育祭とか以外にもあるみたいだけど、完璧校長の気まぐれらしい。

で、夏休みとかそういう長期休校とかでもやる時はあるみたいで、こつちは参加不参加自由だけど普通に授業のある日にイベント発生したら全員強制参加。勿論授業は潰れるから俺としては嬉しいけど。基本はこの三つ。だけど自分に自身がある人はこんなこともいらしい。

四つ目。

授業はサボつても良い。しかし、担任の先生と戦い、勝つこと。（もしくは逃げ切ること）

この時のみ先生は特殊能力つぽいのを使うことが許可される。普通にサボつてもいいけど先生に見つかったら即刻戦闘になる。

「俺に勝てるならサボつてもいいだ。」 B Y 真紅

以上がこの学校の特徴だ。

あ、もう一つあつた。校門より内側に入るとブースターは勝手に消えて、校門より外側に行くと呪文が出て行つになつてゐる。

…で、早速一年生のみのイベントが開始されるわけだ。何でも、

『入学式めんざいじやから早速イベントじじやー』とかこんな感じでイベントが開催が決まつたわけだ。うん…後で校長殴つとくか。

ま、報酬が早速いいもんだから良いんだけどね  
そんじやま、ちよいと頑張りますか。

## ペソード4 サバゲーが始まった

……で、結局何のイベントかつづーと。サバゲー（サバイバルゲーム）だった。

ルールはいたつて簡単。

一年全員は体のどこかに的つぽこを二つつけている。それを探して壊すだけ。

殴り合いで塗我までなら〇×。殺しは黙。上位ハズには豪華商品ができるやつな。

と書つ事で、イベントスタート

『よいかあ一年生諸君！ それではこれより三分後に開始する！ それまでに自分もどこかに隠れるなりするのじゃー移動範囲は一年校舎の中ヒグラウンドーそれと裏庭じやあー』

「つねおおおおおおおー……×いつぽー。

おーおー、塗わんやる氣ですねえ。  
さて、俺も隠れるとするかあ。

『ここ忘れとつたが、そこいらじゅう隠だらけじゃから氣を付けるよ。女子には発動しないから女子は安心せい。失格になつたら一年校舎入り口に来るよつこ。塗のものおー豪華商品を手当してがんばるがよいわあー。』

男女差別！？

何で男子だけ隠あるんだよボケ校長がー！

「じゃあな狼。俺は隠れるとするよ」

「お互い頑張るつか」

「ああ、そうだな」

じやーなーって言いながら見は走り去つていった。

さて、俺も…

『影用るおおう!死いねえええ!』

何でさ!?

「何で!? 何で皆して僕を狙つてるの!?」

『それはああ! 貴様が奈々村さんの頼みを断つたからだあー! そんなことは俺達ファンクラブがゆるさない!』

『何時の間にそんなクラブが出来たんだよー?』

（ついいやつとき紙回してたぞ。内容は影用をやらないか、だった）

見!? どこから伝えてんの!? つていうか何それ!?

（まあ、頑張れよ。ちなみに俺はファンクラブに入つてないからな。じや）

『諦めて殴られりおおー!』

「嫌だ!」

何か偉そうな奴が出てきた。

「皆あ! ヤレエ!」

『オオオオオオオオオオ!』

皆無黙に足速え!

本当に運動神經良い奴だけ集めてんのかよ!

あーもー、めんどくせー。

- 1.たたかう。
- 2.すなおになぐられる。
- 3.ほんきでぶつとばす。

#### 4・「元げる。

うん、迷わず4だな。

「じゃあねー！ファンクラブの皆さんー。」

俺は跳んで逃げた。裏庭の方に。

俺という共通の敵を見失つたあいつ等はその場で乱闘を始めた。皆さんかなり本気で。

『校長じゃ。また一ついい忘れとつた。一年生からの頼みで一年のトップハハ名が参加しておる。お主らの実力じゃ倒せないと思つがそちら辺はコンビプレイで倒すのじゃぞ。まあ倒せなきゃ報酬は皆一年生の物になるだけじゃがな！ハハハハハ！』

一年のトップ？…嫌な予感が…。

つか校長。マジでぶん殴るぞとめえ。

裏庭到着ーっと。

『ー』

「ー」

ピッキングマシーンか！

おおよそ150キロくらいの球が飛んで来た。  
まあ、それがどうしたって感じだから。

「ほつ」

ベシッ！

「ンッ！」

蹴り返した球がマシンに直撃。

うむ、我ながら素晴らしいコントロールだ。

パチ、パチ、パチ、パチ

「よくぞここまで辿り着いた」

「誰です？」

「喜ぶんだな。」このN-05、斎藤葉介が自ら相手になつてやる。「うう」

「なんだ、葉兄か。つていうかその台詞はD-E 様の台詞だよね」「狼、その通りだ。D-O様カツコいいよな。

それはともかく…、俺の報酬の為に死んでくれッ！」

言い終わる前にもう走り出してた。

まずは…様子見だな。

「オラッ！」

勢いを殺さずに飛び蹴りしてきた。真っ直ぐに。

「はっ」

こんなん体を捻りや動かなくても避けれんぞ？

「甘いっ！」

「…？」

空中で向きを変えやがつた！？

何でだ？まあいい。

とりあえず後ろから蹴られ、前に飛ばされたからそのまま転がつて距離をとる。

幸い、ターゲットは壊されなかつた様だ。

「葉兄、何？今の

「教えるかよっ！」

また走り出す葉兄。

「ふーん…。ま、いいや」

「もつぱつ喰らえ！」

また飛び蹴りしてきた。

関係ない。ただ正面から反撃してやればいい。

「遅いよ……葉兄？」

パパパン！

「……え？」

「残念でした。僕には勝てないよ」

俺に言われてから制服を見る葉兄。

「全部…割れとるッ！？」

「じゃあね、葉兄。僕とやるならもうひょいと強くなつてからね  
「ノーザン…狼に負けたああー！」

うーん、それにしても。  
すげえいい景色だ。

……え？ どこにこるかつて？

それは、裏庭の一番デカイ木の枝。

いやあいい所だ。

周りが良く見えるし何よりも見つかりにくいし。

グラウンドの方もまだ乱闘してるっぽいし、ちょっと寝るかな。

その頃のグラウンド。

ワーワー！

せ、戦友ー！

俺はいいからお前だけでも生き残れ！  
すまんー恩にきるー！

「おーおー。面白そりゃなことしてるじゃないか」

「私もー混せろおおおおー！」

一年生Ｚｏ３到着。乱闘開始。

数分後。

「ＺＺＺ…。ん、何だ？もう乱闘が終わつたのか？」  
さつきまで騒がしかつたグラウンドが静かになつていて。  
「つかしーな。もう暫く続くと思つてたんだけどな」

枝の上で軽く体操。…うん、快調快調。

「ま、行つてみつか

木の枝から一年校舎屋上へとジャーンプ。

で、そのまま校舎を通つて教室の窓から出てグラウンドへ。

何故屋上から飛び降りないかつて？

目立つちゃうじゃん。

『校長じやよーん。たつた今残りが30人になつたぞ。あと少しじ  
やから頑張れー』

「ハア…一年生もまだまだ弱いねー」  
乱闘後のグラウンドに誰かいる。  
多分一年生だらうな。

「何だ、まだいたのか。お前は私を楽しませてくれるか？」

「知りませんよそんなの」

「行くぞ！」

身構える一年生。

「面倒なんできょつと本気で行きますよー」

そうだな、2／10つて位でいいか？

「ほい」

パパパパアン！

「なつ！？」

「残念でした。失格です」

さてさて…色々聞かれる前に逃げますか。

『一年生諸君。面白いことに一年生の影月君が一年生を倒してまわつとるぞ。このまま行けば報酬が残る可能性もあるぞ。といつ事で頑張るのじゃー。…ズズズズ。あちー！教頭！このお茶熱すぎつ！』

この放送がなつてゐる間にも四人ほど失格にしたんだけどねー。

『あ、残りは10人じゃぞー』

「あと二人か。さくつとやるかね」

「ほう。私をさくつとやれると思っていたのか、後輩は。舐められたものだ」

…うげ、この声は…。

「それなら本気でやつてもいいだろ？ な、後輩？」

「…………サイナラ」

逃げるが勝ちだ！

この人恐ろしいんだぜ？ 中学の時一回【ピ】【されかけたこと】あるもん。

「待てええ後輩！止まらないと【ポーー】とか【ピーー】するぞー！」

良い子の皆さんばかりこの中は知らないといいんだよ

B Y 作者

「そんな事されると分かつて止まる奴はいない！」

今俺は常人では着いて来れない筈の速さで走ってる。

だけど先輩は常人じゃないから俺について来れるわけで。

「逃がさないぞ後輩！」

でもつて、決定的なこと。

俺は気に入つた人には全力を出せないんだ。

何でだろう？ 体質かな？

先輩はむしろ、俺を弄る時にしか本気が出ないらしい。

だからあ、逃げるしかないのさつ！

「来るなあああ！」

「さあ私と一緒に大人の世界へ踏み込もう！後輩！」

「嫌だあああああああ！」

扉を開いたらそこは屋上だつた。

…屋上？

「逃げ道がねええ！？」

「追一いつ一いた！」

どうする…どうする？俺！

捕まつたら確実に【ピ】だ！

でも逃げ道が無い！

「さあ…覚悟はいいか？後輩」

ゆらりゆらりと一步ずつ近づいてくる先輩。

あ…一つだけ逃げ道が！

「行くしかない！」

俺はフェンスを飛び越えた。

「ハハハハハ！サイナラ先輩！」

「…あ。その下女子更衣室で二年生が生着替え中」

「何ですとおおおおおおお！」？

「うおおおおお！掴め！掴むんだ俺！フェンスを掴めええ！」  
掴めなきや高校生活が大変なことにいい！

ガシッ！

「セーフ…」

「だと思つてゐるのか？後輩」  
上を見るとそこには先輩がいました。

「ドチクショオオオ！」

右手に力を入れて一気にフェンスの上へ。  
そしてそのままフェンスの上を走つて加速。  
んでもつて裏庭に向かつてジャンプ。

「俺は鳥になる！」

：ふ、今度こそ逃げ切つただろ。  
「クツ、逃がしたか…」

『そこまでじやつ…』

『たつた今、残りが八人になつた。よつて終了じや。今から一年校  
舎入り口に集まるのじや』

「よし、皆集まつたな？」  
今ここには俺含む八名の勝者が集まつてゐる。  
名前が分かるのは見と先輩だけ。  
後は知らん。

「お待ちかねボーナスタイルじや。この箱に入つてる棒のどれを引  
くかは君達で決めてくれ」  
「まあどれでもいいんじやね？俺はこれくつと」

一人が決めたら皆もそれに選び始めた。中にはじやんけんで決めてる奴らもいる。

「狼。お前は選ばないのか？」

誰だ？ つて何だ、見か。

「僕は余り物で結構上  
手うか。じゃ、俺二

をいかにしやう備考添めてぐる」とある。

數分後

よし、じゃ一斉に抜くがよい。交換はしたかつたら自由にするのじゃ。報酬は今日の夜にそれぞれの家に届けておくぞ。それじゃわ

『せーのっ！』

「お、俺は高級ソフナーだつたぞ。お前は？」  
「今見るとこ」

…お、先に何か書いてあるぞ？  
どれどれ…。

# 『魔剣ダーイン・スレイヴ』

「何で魔剣？」  
「知らないよ」  
「教室戻るか」  
「だね」

教室。

「皆分かっただか~? イベントってのはみんな感じだからな~。イベントは本当に校長の気分でやるから普段から体を鍛えるのもいいぞ。ちなみに、体育の授業ではイベント盛り上げる為に地獄のよくなトレーニングやるらしいだ~」

わざわざトレーニングするんかい。

まあいいか。

「いいのか?」

「あれ? 僕声出てた?」

「いや、そんな感じがしたから言つてみた」

「お~、皆立て~。今日はこれで終わりだ。明日遅刻すんなよ~。

礼

礼をして教室から出て行く我らが先生、真紅先生。皆もそれぞれが帰る準備をしている。勿論、俺も。

「じゃあね、見。また明日」

「お~、じゃな狼。また明日」

ああ、今日は先輩から逃げるのに疲れたな。  
帰つてのんびりするとお~。

## ペソード4 サバゲーが始まった（後書き）

作 どうも、今回から後書きを書こうと思います。

狼 今回からって何だよ。

作 そのまんまだよ？それにしても大変な先輩を持ったね狼くん。

狼 全くだ。あの人は加減つてもんを知らない。俺に対してだけ。

作 それは置いといて。最初のイベント、楽しんで頂けたでしょうか？

狼 誤字、脱字等があつたら感想とかで教えてやってくれ。…あ、つまらなかつたらつまらないって言ってやってくれ。

作 その場合、頑張つて皆さんに楽しんじただけるものを書こうと思つております。

作&狼 それでは、感想、評価を待つてまーす（待ってるぞ）

## Hペソード5 生徒会に誘われたよつな誘われなかつたよつな

あ、どもども。狼です。

俺は今、またしても面倒な事に巻き込まれています。

それは、我らが先生、真紅がめつたチョーク投げてくるんですよ。

何でかつて？それは……

（一時間前）

「…ん…」

ふあ～…よく寝た。

お、今日は田覚ましが鳴る前に起きたか。

微妙に嬉しい。

何ですがすがしい筈の朝に魔剣が有るんだろうなあ。  
黒いし、カタカタしてるし、何かあきらかに封印っぽいのしてある  
し…

ま、持つてみるか。

チキッ！

お、結構軽い。中々いいじゃねーか…

♪♪チ…チヲ…ヨコセ…♪♪

「うおお！？」

急げ！片付けろ！確かに魔剣だぜ！こりゃあ！

俺はすぐに自室の片隅に片付けた。

「よし、とりあえず朝飯を作るかあ

（数分後）

あれ？ そういうや曇飯つてどうすんだろ？

弁当かな？ それともポイントを使って買うのか？

弁当でいいか。

（更に数分後）

「（）馳走様でした」

よし、弁当も作つたし、着替えて行くか。

自室へ着替えに行く俺。部屋の片隅でカタカタしてるのはあえて気  
にしない方向で。

「よし、行こう」

（現在）

で、途中で弁当持つってきてねえ！ って気付いたから戻つて取つて來  
たんだがそしたら遅れたと。

「おらあ 影月！ 一日目から遅刻とは何事だ！ ？ オラオラオラオラオ  
ラオラオラア！ 」

前回は俺がキヤッチしてしまつたらしい（見談）。

今回は数で勝負か。

「無駄です。無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄  
ま、俺は威力を弱めながら全部見に流してるんだけどね。

ちよ、狼、やめ 痛ツ、マジでやめて

次々と見の顔に命中していく弱チヨーケ。

# 一発強チヨーク発射しようかな。

卷之六

「最後の食いしん！」

「嫌です」

で、ヒンで真紅先生にはじき返してみた。  
(強めに)

ベ  
ロ  
オ  
ン  
!

あらま、教卓壊れちゃつた。

あー あー 教卓か…… まあ し 校長に買わせたか 畫用 座て

「たま」

やつと座れる……。

狼痛かたそ

「いやあ、しないでたらまたまぞこちへ飛んだだけだよ、わざと

# キンコーン カーンコーン

「お、チョーク投げてたら終わっちゃったか。起立、礼。終わりー！」

「次の授業何?」

「あれ? 瞞ると音が聞こえる刃りかうして本物じやないか? それよに魔劍だけどどうだ? 」

「ほんとに魔剣なのか。校長はどうして集めてくるんだろ?」

「知りなし」

次は数学かサボる。

「見。僕次の授業サボるから宜しく  
いいのか？テスト近いらしいぞ？」

「え、テスト近いんだ。

「どうでもいい。じゃね

一階の窓から外へ出る。

さて、どこへ行くかね。

その辺探して気に入つたところで寝るか。うん、そうしよう。

と、いうわけで今色んなところで飛び回って探してるんだよ。

裏庭のあの木もいいんだけどなー。

やっぱ色んな所見てみたいじゃん？

……お、いい所見つけ。

着陸つと。

そこはいい場所だった。

小高い丘で、丘の上には木が何本か生えてる。

地面は芝生で寝転がるのにいい。

何故か小鳥や小動物が生息しているが、とてもいい場所だった。

問題は三年校舎が近いことかなー。まあいいか。  
日なたはさすがに暑いかな。木の陰に入るか。

よし、寝よう。

～三年校舎・生徒会室～

「あら、一年生」

「ふふ、わざわざこんな所まで来るなんて…面白い子ね

「それに… 可愛い。生徒会に無理やり入れちゃ めつけられ

「ウフフフフ…」

「ンンン…ンンン…」

「そこの君」

「ンンン…ンンン…」

「おーー！君！」

…ん~…

誰だよ… まだチャイム鳴つてないだろ？が…

「…僕ですか？」

「そう、君」

地味な人だった。

「生徒会に「嫌です」？」

ふ…即答してやつたぜ。

「そう。ま、まだ時間はあるし、考えるだけでいいからね。その内会長が行くと思うから」

何だよ。断ったのにまた来んのかよ。

「それじゃ、俺はこれで」

言うだけ言って帰りやがったよ。  
んー…俺も戻るか。

急いだらサボった意味無いからゆづくづ歩くことよ！」。

それにしても生徒会か… 考えても無かつたな。

ガラガラッ！

「ただいま戻りました、おつと」

「チツ。不意打ちも駄目か」

「まだまだですね。真紅先生も」

## キーンゴーン カーンゴーン

「おーし。四限終了。起立、礼」  
礼をしてさっさと教室を後にする真紅先生。チョーク投げの練習で  
もすんのか？

「狼、お前どこ行つてたんだよ」

「んー、その辺探してたらいい場所があつてそこで寝てた

「一時間も？」

「うん」

「アホか。勉強しろよ」

「めんどう。それより昼飯だよ」

「そうだな。俺は購買行つてくる」

「ん、ここで待つてる」

「お前は買に行かないのか？」

「弁当作つてある」

「……」

「見？びつかったの？」

「食われてるぞ、お前の弁当」

「え？」

俺は後ろを見てみた。

「おつ、なるほど。」

「あれは先輩だな？」

「先輩！何俺の弁当食つてんすか！」

「もぐもぐ……」くん……それは私が先輩だから……」

「意味が分からないです！」

「あ、俺の弁当箱が空に……」。

そしてゆらりと立ち上がった。

「さあ後輩。昨日の続きと行こうつか

「嫌ですうううう！」

「逃がさないぞおおおおおお！」

「俺と先輩は走り出した。

「よく分からんが頑張れよー」

俺がこの後毎休みが終わるまで逃げ続けたのは言つまでもない。

## ペソード5 生徒会に誘われたような誘われなかつたよつた（後書き）

学校はどうだい？狼くん。

先輩がいなきやいいんだけどな。

こらこら。先輩は敬いなさい。

やだ。

そういうば生徒会に誘われてたけど、どうすんの？

狼入る気は無いな。

作そうか。

作さて、最新話を更新しました。今回は若干短いですね。

作面白くなきや読まなくてもいいんだぞ。

作「うううう、やつこつ」と言つと読者様が離れて行つちやうでしょ。

狼 まいい。このアホな作者が書いてるこの小説を読んでぐださつてる皆さん。ありがとうございます。

作 誤字脱字や感想、評価を心よりお待ちしています。あ、後校長にやつて欲しいイベントがありましたらメッセージでも感想でもいいので書いてくださいね。

作&狼 それでは、また次話で会いましょう。

## ヒストリー6 全校VS俺！？～前編～

時は昼休み。場所は最近作られた大食堂。（生徒が増えたから作つたらしい）

今、俺はなんと…なんと！

蕎麦食つてます。はい。

ちなみに隣では見がうどん食つてる。

「中々美味しいな

「そうだね」

「ずるずるー、と一人して麵をすする。うむ、平和だ。

昨日は持つてきた弁当を食われ、なおかつ先輩に追われるという最強コンボをくらつたからな。もつ弁当は持つてこないと誓つた。自分に。

「それにしても大変だな、お前も」

見がうどんを食つて、話しかけてきた。

「ん？ 何が？」

「あの先輩だよ。夜波先輩だつけか？」

「食事中。先輩の話題は禁止」

「そんなにあの人の事嫌いか？」

うん… また答えづらい質問を…。

「嫌いじゃないけど…」

確かに、嫌いじゃないけど好きか?と聞かれるどどうなんだろう?

?自分でも分からん。

「好きなのか?」

「どうなんだろ?分からない」

「分からないって自分の事だろ?」

「まあいいじゃん」

俺は食い終わった食器をもつて席から立つた。  
見もついて来た。

「そうだな」

食器を厨房のおばちゃんに渡し、大食堂を後にする。  
ポイントを使うのは気に入らないけど美味いから明日も同じで食おう。

「…で、そこにはいるみたいだが?」

「そりなんだよねえ。どうしようつか」

「頑張れ。俺は屋上で高みの見物、とさせてもいいから」

「…後輩。私の弁当は?」

見がそそくさと横を通りて行つてしまつた。

「知りませんよ。忘れて来たんでは?」

「違う。私への愛情が詰まつた後輩の手作り弁当の事だ」  
「弁当は作つてません。後、愛情も入つてないです」

「……そりか」

…お、いつもゆらゆらとした動き。

・・・・・来るな。

俺は逃げる準備をした。

「ならこの科学部の友人特製の新薬を飲むといい!」

今だ!先輩を飛び越えるんだ、俺!

「上…? チツ!」

ギリギリ抜けた。後は走り去るのみ!

「だあれがそんな物飲みますか！」

一気に加速した俺は先輩を引き離す事に成功…

「今のは弁当を作ってくれなかつた後輩への怒りによつてパワーアップしている。簡単に逃げれると思うなよ、後輩」

してなかつたあああ！

「逃げ切つて見せます！」

ずっと全力はさすがに疲れるからスタミナが昼休みの間持つ程度の速さで走つた。

（校長室）

「監視カメラきどーう。今度のイベントは何をしようつかの。クラスの代表を決めて逃走中とかもいいかも知れんの」

ブウン

監視カメラが一斉に作動する。

「どれどれ…面白いことは無いかな」

校長は映像を切り替えていた。

「おや、影月君か。ヒヨツヒヨツヒヨ。先輩と奥ハリツ二か」

校長は少しの間考えた。

今日はこれでいいかのー、と。

「良い事を思いついたぞ」

今度は違うスイッチを押し、マイクの様な物をどこからか取り出した。

ううおおおおお…！

今日の先輩マジでパワーアップしてゐよおお…！

常人の限界超えてるよおお！

……あ？俺？お袋と親父がアレだから常人じゃないと黙つよ。自分で言つて悲しいけどね。

「待てえええ！そして諦めて私の【ペ】か【ボ】になれええ！」

「どうちもR-18指定じゃないつすかー嫌ですよ！」

『全校生徒の諸君ー。校長じゅー。とつあえず自分の上を見てくれんかのー?』

上え？何があるんだよ。

…つて俺達が映つてるー?なんで?

『これからまたイベント…つていうか賭け事をしようと思つ。影月君が逃げ切れるか捕まつてあんな事やこんな事をされるか…。どちらに自分のポイントを賭けるのじや。ポイントカードから賭けることが出来る。なお、夜波君の方に賭けた場合、影月君の妨害をすることが出来る。』

テメー校長ふざけんなああー！ー！

後ろで先輩が黒い笑み浮かべてんだよー！

そういう事は次回やれつづーのー

『ちなみに言つとー一定数を越えた時点で5・6限がこのイベントで変わる。そういう事で応募をまつとるベーー』

皆応募しないよな？シナイヨナ？

頼むぞー応募するなよー。

『風菜ファンクラブ一同おおー全員応募せよおおー』

『おおおおおおおおおおおおおお！……』

『やしてあのてくべき影刃狼を捕獲するのだ……。』

『イエツサアアアアアア！……ボスウウウ！……』

「あああああ！心慕する気満々じやねーかコンチクシヨオオオ！

『あ、そつそつ忘れじやが、賭けに当たった女子は『一日狼君に命令し放題権』を抽選で一命様にプレゼントじやぞー……おおう、一気に女子の参加率が上昇したぞ』

全校の女性の監視あああん！？

貴方達は鬼ですかああ！？

『と、言つわけで。5・6限は鬼！』じやあ……。』

「ふふふ……絶対絶命じやないか、後輩」  
「チクシヨオオオオオオオ！……」

狼 たあああくしゃあああー...ビー」行きやがつたあー...ぶつ殺ーす！  
作 （あぶねーあぶねー。透明マントを親父さんから貰つていて良  
かつたぜ。）

狼 けつ。クソッ...いないのかよ...。

作 （さあさあどうなるんでしようねえ？この黙りいつ。作者も樂  
しみです。）

作 行つたか...。

はい、今回も短いつですねー。申し訳ありません。

次回は長めにする予定です。そのため、少し時間がかかるかも  
しません。ですが、出来る限り早く書いつと想いますのでど  
うか見捨てないでください。お願いします。

さて、皆さんはどちらが勝つと思いますか？

作者のこの私もまだ決めていません。何せこの小説は作者のノ  
リと気分で出来ていてるからです。

…あつーやべつー狼くん來たつ！

そんなわけで今回はお終い。感想・評価、それと皆さんの賭  
けの予想を待つてますよおおおおおおおおおおおおおおおおおお

『ルール説明、じゃ。夜波君側についた人たちは影月君を夜波君に引き渡す、もしくは夜波君が影月君を捕まえたら勝ちじゃ。影月君側の人たちは手出し無用じゃが、6限まで影月君が逃げ切つたら勝ちじゃ』

6限までつづりと残り約一時間か？

あー…だりい…。

「ふふ…私は少し休憩しよう。全校の皆が後輩を追うだろ？からな」「こおの鬼先輩がああ…！…逃げ切つてやるからな…！」

全校の皆…。えーと…一年で10クラス×2×40人だから800人だろ？一年も多分同じくらいだろ？から800人。三年もやつぱ800人くらいか？

うつわ…2400人も追つてくんのかよ…。

「暫くしたらまた追う。覚悟しておくんだな、後輩」

「もう来んなアホ先輩」

それにもしても…

「校長ー。一千五百対一つてのは酷いんじゃねーかー？」

『そうじやな。諸君、追加ルール、じゃ。影月君を追えるのは各クラスの代表を一人と、各部活動の部長のみにする。各クラス、話し合いで代表を決めるのじゃ。更に特殊ルール。影月君を夜波君に引き渡したクラス、もしくは部には特別な報酬を出そう』

やっぱ聞いてやがったか。  
まあ逃げやすくなつたからよしとしよう。

「んじゃ、後一時間逃げ切るとするか」

「数分後、グラウンドへ

「第一投擲部隊、放て！続いて第一第二部隊、前へ！」

号令と共に投げられる槍（恐らく本物）。狙いは多分、俺。

「第一投擲部隊は第四捕獲部隊と合流し、目標を追え！第一投擲部隊は十秒後に投げる！」

ほんっと、何でこんな事になつてるんだろーなあ。

……俺、何か悪いことしたつけ？

「独立抹殺部隊、目標を殺れー！」

殺られてたまるかつーの。

そのまま数分走ると、中央校舎が見えてきた。

確かあそこには美術室や図書室、音楽室があつたはず。あそこで隠れるか。

更に走ること数秒。

入り口に到着した。すぐに中に入り、隠れる時間を稼ぐために鍵を閉める。

「さて……どこに隠れるかな……」

二階の図書室でいいか。

階段を上り、二階へ。

「つおおつ……」

凄い。凄すぎる。

何が凄いかって言つと本の数だ。

壁一面に本棚があつて、それが天井まで続いている。

……それ以前に、この階だけ一階分使つてないか？広すぎだろ、二階。

…おつと、今はそれよりも隠れる場所を探さなきやな。

部屋の奥の方に、三階の一階に上るための梯子を見つけた。

俺は梯子を上った。

「……珍しいわね」

上っている途中、声をかけられた。誰だ？

とりあえず梯子を上りきる。そして声のした方へ向いて聞く。

「誰かいるんですか？」

「いるわ。ここに」

声の本人は一階の一一番奥にいた。

「貴方は…今、逃げている人ね」

「そうです。そういう貴女は…追っ手ですか？」

追っ手ならすぐに逃げなきやな。

俺は何時でも逃げられるように身構える。

「違うわ、私はただの本好きの女。今の賭け事には参加してはいるけれど」

「参加してるんですか…」

「ええ。客観的に見ても貴方は不利。だから夜波さん側ではあるけれど、参加しているわ。……まあ、私は教室にいても煙たがられるだけだから行つてない。だから貴方の追っ手ではないわ」

「教室に行つてないって…授業にも出でないんですか？」

「バアアン！」

「…げ、来やがつた。

「すいません、僕は隠れるんで、ここにいることは言わないで貰えませんか？」

「いいわよ。ひとつ貸しになるけど」

「分かりました。その借りはそのうち返します」

「ふふふ…。交渉成立ね」

はあ…一体何を要求される…ひや…。

とりあえずどこかに隠れなきや。

「隠れるならここに隠れなきや。来なさい」

「はあ、分かりました」

俺は奥へと進む。そこでやっと声の本人、女性の顔を見た。

……で、どこへ隠れればいいんですか？」

机の  
下?

株式会社

待てマテまで、この人は女性だ。机の下なんかに隠れたらそれこそスカートの中とか…色々見えちゃいますよ！？

「…………それは色々ありますこのでは

一なら捕まつちやうわね。確實に

「×〇。 驚く

「ふふふ…最初からそうすればいいのに」

落ち着け……落ち着け……落ち着け……。

## 理性で本能を抑える。

今俺は詰もしない所で一人で隠れでいるんだ：

卷之三

モゾモゾと何かが動く。

本能が言つ、『見たい』と。理性は言つ、『駄目だ』と。

俺は理性で本能を殺し、目を閉じたままにする。

よし！ここで最後が！探せんか！

「アーティストがアーティストにならなければアーティストにならぬ」といふのは、アーティストの本質を述べたものである。

本能（本当に開放されたいのかい？）こんなチャンス、一度とねえ

七  
?

（チラッ と な ら 大 丈 夫 だ ！ 事 故 で 言 い 張 れ ば い い ！ ）

本体 そうか…大丈夫なのか？

理性 (駄目だ！それは名も知らぬ彼女に失礼だ！)

本能 (てめえは引っ込んでろ！)

理性 (黙れ！)

本能 (!…?)

理性 (そして聞け！我は理性、人の良識。そして…本能を断つ剣なり！)

本能 (ちょ…)

理性 (咆える斬 刀！届け！雲耀の速さまで！)

本能 (待て待てま…)

理性 (雲耀の太刀！その身でしかと受け止めよつ…)

本能 (やめろおおお！)

理性 (チエストオオオオオオオオ…!)

本能 (ぎやあああ…!)

理性 (我が斬 刀に、断てぬ物無し。)

「ここにもいない…。違う校舎だ！皆、行くぞ！」

俺の中の本能が理性によつて一方的にやられた直後、追つ手の方々は図書室を去つていつた。

そして俺も机の下から転がり出る。

「…………はあ、助かった」

ほんと、色んな意味で。

「良かつたわね」

「ええ、助かりました」

「それより…見たでしょ？」

「見てません。俺の中の理性が本能を抑えきました

「本当かしら？」

「本……です。…それより、何でこの一階部分に来なかつたんでしょうね

謎だ。あんなに見つけやすい場所に梯子あんのに何で来ないんだろう。

「簡単な事よ。」「には私がいるもの」

「…………はい？」

「どうこうことだ？」

「私がいるから、彼らはここに上がつてこなかつた。そういうことよ」

えー……それってつまり、

「僕は机の下に入らなくとも良かつたんじゃ……」

「ええ、そうよ」

……。

「貴女の相手をするのは精神的に疲れます。もう行きませ

「あら、残念」

何に残念だよ、何に。俺を弄ることかこのやうー。

「今日の事は貸しよ。いつか返して貰うわ」

「はいはい、分かりました。それでは」

さあて、後一時間弱……どうするかね。

結論からして言つと。

一時間という休息でスタミナを全快させた先輩が謎の先輩（）である人。仮面付き。女性（）を連れて俺を追つてるんだよなあ、これが。しかも謎の先輩は普通に俺について来てるし。一体何者？まあぶつちやけ本気の俺は風を超えるけどな。

「先ぱーい。その仮面の怪しい女性はどなたですか～？」

「ふつふつふ……、秘密兵器だ。そして後輩にも関係のある人物だ」

俺に関係のある女性？

「誰？お袋？」

お袋だつたらまずいなー、確實に捕まえられて先輩に差し出されち

やつよ。

「何をぶつぶつ言っている、後輩

「あれ？ 声出てました？」

「バツチリ」

「うーむ、いかん。直さねば。

「そりそろ諦めてくれませんかねー」

「嫌だ。【ペ】して【ペ】にしてやる。その後ゆつくつと教育しなおして… くつくつく

うーわー、凄え黒い笑みだよ。

捕まつたら何される事やら。

「待て。その際には【ペ】もあるべきだ」

仮面の人おおおー？ 何をアドバイスしちゃつてんのおおおー

「それもいいな。まずは捕まえよ！」

「そうだな」

これ以降は無言になる先輩方一人。

心なしか速くなつてるような気がする。

「速さで勝てると思わないで下さこよ、先輩

俺も若干スピードを上げる。

後は持久戦。

（一十分後）

「…はつ…はつ…はつ」

「ん？ どうした、秘密兵器

「…はつ…風菜… これさ…はつ…はつ」

お、やつと脱落か？ 脱落してくれると嬉しいなあ。

「息しづらこんだよおおおおー！」

おー、仮面を… 投げ捨てたあー？

ん……なんだろう?謎の先輩の顔に見覚えがある。

- お袋? -

「違つぞ、後輩。戸籍上、後輩の『姉』だ」

— それ、どうしたんだ？

何いいいいいい！？

どうか、お袋の血を受け継いでるから俺について来れたのか。

なたのと ても特語はされてないみたいだ  
捕まつらやうらしみ、 簡。

あれ？

「俺つて家族からも【ピ】されかけてる?」

「どうなんだ？ 涼」

顔を赤らめて頷きやがった

近親相姦じやん

愛にはそんなもの関係なしんだよ

セイリヤの本

施の上である。構成は、第一から。

『ピーンポーンパーんぽーん。影月君にボーナスタイルじや。今から残り三十分まで、相手を氣絶させる程度になら手を出してもいいぞ。ただし、夜波君には触れた瞬間にアウトじや。それじや、五分間、頑張るように。おーい、教頭ーお茶淹れてー』

なになに?ボーナスタイルはどう?

先輩には触っちゃ駄目だけど、姉らしき人になら触れてもいいのか。  
ラッキー。チャンスじゃん。

「そういうの覚悟してくださーい。自称姉貴さん?」「自称じゃない」「

走っている方向を前から後ろへ一八〇度変える。…あ、読者の皆さん

は真似するなよ？足首捻るから。

「先輩、後は頼みました」

一気に近づき、自称姉の首に手刀を喰らわせる。  
俺は親父に教えてもらつた事があるからこれで人を氣絶させるへり

いはできる。

「え？…っておい一澤！？びりした！？」

「氣絶させただけですよー」

先輩から離れながら一応伝えておく。

さあて…散々追いかけくれやがつた生徒達、今すぐ反撃してやるから待つてろよ。

グラウンドで会議をしていた生徒たちが全員氣を失つたのはボーナスタイルに入つて二分後のことである。

『終了～。皆の者、お疲れじや。追いかける役じやない人も中継を見れたはずじや』

終わつたあ～。

長い鬼ごっこだつたぜ。

『恒例の結果発表じや。え～…今回の賭け、当たつた者は一人じや。一年二組Bの筒井見。それと逃げ切つた影月君は一年校舎入り口で箱から棒を取るのじや。外れた諸君にはポケットティッシュをプレゼント。それじや、今回のイベントは二二二二まで、全校生徒はすぐに教室へ戻ること』

見の奴俺に賭けてたのか。  
だつたらいつものテレパシーっぽいのでサポートしてくれりや良かつたのに。

「お~い、狼

「見か。何の用?」

「報酬貰いに行こうぜ」

「分かった。今行く」

「それにしてもさ、お前よく逃げ切ったな

「ん~家庭事情で体力はあるんだ」

「どんな家庭だよ、それ」

「そんな家庭さ」

どんな家庭だつたかは皆様の「」想像に任せます。  
いつか公開するけど。

「お、あつたぞ」

見が走つてく。

俺もそれを追つて行く。

「今回は何が当たる事やら……」

魔剣はもういらぬいな。実用性皆無だし。

「よし……これだつ！」

見が棒を一本引き抜く。

「じゃ僕はこれでいいや」

ノリで特に何も考えずに右奥から二本田を抜いてみた。  
どれどれ……今回は何かな~つと……

『魔剣 グラム』

。

「見、何も言わずに交換してくれないかな？」

「やだ」

「お願い。今回もあれだから」

「やだ」

「変・え・て」

「い・や・だ」

「…ハア」

「じゃ、俺は教室に戻る！」

溜息ついた瞬間に逃げやがった。

…俺も戻るか。

この後、チョークが飛んできたのはいつまでもないこと。

## Hペソード7 全校VS俺！～後編～（後書き）

突然ですが、愛用のパソコンが逝ってしまいました。  
そのため、更新が遅れてしまいました。  
待っていてくださった方（いるのかな？）すいませんでした。  
次回からはまた早めに更新していきますので、ご安心を。  
こういうのをやってほしい……っていうのがありましたら、感想でも  
何でもいいので教えてくださいね。

全校生徒（見以外）との戦いからはや一週間。  
一年生の中ではある噂が流れていた……。  
それは、美少女の転校生が来る、といつ噂。

まあ別にどうでもいいんだけどね。

それよりも今はあれだ。

とうとう来てしまったのだ。体育の授業が。  
先日、2組（A B 合同）が体育の授業に当たっていた。  
しかし、あまりのきつさで生徒たちは皆、授業終了まで持たなかつたとか。

～グラウンド～

「ねえ狼くん。一体何をやるのかな？」

俺に話しかけてきたのは奈々村さん。  
あまり出番がない人。

【こら、影薄いとか言つくな】

だつたらもつと出してやれよ作者。

【ん～まあそのうちね～……】

口笛吹きながらどつか行きやがった。

逃げたなあの野郎。

「何をするんだろうね」

「相当きついらしいな」

「あれ？見、いたの？」

「今着替え終わって来た所だ」

「見くん、そんなにきつい授業なの？」

「ああ。何でも2組の連中が授業終わりまでもたなかつたとか」「ええ。私耐え切れるかなあ……」

俺も耐えれるかなあ……でもお袋の特訓の方がきついだろうから大丈夫か。

「おーしー授業始めるぞーー全員整列ーー！」

「お、3組は整列速いな。俺の名はキャプテンブライ……」

「先生！それ以上は危ないと私は思います」

「よし見！ナイスツツ」//

「悪い悪い。俺は<sup>いわいし</sup>岩石だ。体育の授業を担当している

うーん……名は体を現す……だっけ？

あれの通り、岩石先生の体は岩石みたいだ。

一メートルくらいの身長、筋骨隆々な肉体、日焼けして真っ黒な肌。そしてなんと！歯がありえないほど白い！新庄選手並の白さだ。

まあそれはおいといて。

「自己紹介はここまでだ。さあ授業だ！」

性格は熱血漢みたいだ。

「まずは基礎体力を調べるーーこの先に一周一キロのコースを用意した！そこをまずは…五周でいいか。二十分で五週して来いーー」

一周4分か。どうとでもなるな。  
たいしてきつともないし。

「狼さん？何をそんな余裕そうな顔をしてるんですかい？」

「見？喋り方がおかしいぞ？」

「乐じやない？たつた五キロだし」

「たつた…？」

「うん、たつたの五キロ」

「… そういうや前回家庭の事情で… とか言つてたもんなお前  
「すご」いねえ、狼くん。私なんか全然体力ないのに」  
「ほりそこの三人ー早く並べ！始めるぞー！」

「行くぞー！位置についてー、用意ー」

掛け声がかかる。それと同時に全員が走る準備をする。  
勿論、俺も。

「スタートー！」

パアーンー！

開始の音とともに全員が走り出す。

皆、一秒でも早く終わらせたいんだろう。

… 何故ならこの授業、学園の規則で罰ゲーム方式が採用されている  
からな。

そう、つご三分程前、岩石が言つたんだよ。

「一秒でも遅れたらその時点で罰ゲームだ！ それからは30秒ごとに罰が厳しくなっていくぞー！」

「前回は2組全員が目標に間に合わなかつたから罰ゲーム出したんだが」「だが」

「全員すぐに倒れた。まったく、最近の奴らは貧弱だー！」

とのことだ。だから皆真面目に走つてるんだよ。

ちなみに、同じ罰ゲームでも「ゴールした順位によって変わるらしい」。よつて、皆かなりのスピードを出している。罰を受けたくない一心で。

～十分後～

十分が経つた。目標では2・5キロは走ってないと間に合わない。俺と見は十分間に合ひた。

「皆必死だねえ、見

「そう…だな」

「奈々村さんは余裕っぽいけどね～」

「あ…きつくなつてきた…」

「体力ないね」

「お前と…話してゐからだよつ」

「だつたら聞き流せばいいじゃん」

「ああ…そうする」

見は走ることに集中した。

…と、なると。暇だな。

さつやと走るか。

「見。僕もう退屈だからもう終わらせやね」

「…はつ…はつ」

「じゃあね」

膝に力を入れて、一気にコースの脇にある木に向かって跳ぶ。そして、その木から次の木や物にへと跳んでいく。多分、見には俺が消えたように見えただろうな。

一分経つたくらいで四週目まで終わった。

後は一週だ。

軽すぎる。5キロなんて。

残りはゆっくり走るか。

周囲にばれないように気をつけながら下に下りる。そしてそのまま走る。

……お? あれは見だな。

「お～い見、後何週?」「

「後…ハツハツ…一週だよ」

「へえ。まあ頑張つてね」

「ゴール、と

軽い軽い。たつたの5キロだしな。

「影月!速いなお前!タイムは1~2分だ!」

ストップウォッチを片手に近づいてくる岩石。

「それにしてもお前、何でそんなに運動出来るんだ?」

「何でつて…お袋のせい?」

説明するのは面倒だからやつぱり『お母さん

「家庭の事情です」

で終わらせる。

「そうか。それよりも、俺の授業だけは真面目に受けたよ?」

「適度にサボります」

「はつはつは。教師の前でサボり宣言か

「はい。サボりますとも」

「はつはつは、でも気をつけろよ?一年のトップクラスの夜波がな『打倒後輩!』とか言って最近努力してるからな」

「…マジっすか?」

「ああ。…そろそろ皆走り終えて戻つてくる頃だな。じゃ、罰を考えるから俺は行く」

「はい、分かりました」

夜波にやられない様に気をつけろよ~、と言ひ残し、ゴール辺りに向かって歩いていく。

…さて、どうしようか。

やることも無いしな。

…あ、見がゴールした。

ん?先生が何か言つてるな…。

ちくしょおおおおお！…、と言い残しまた走つていった。

なるほど、罰ね。大方もう1セツト走つて来いとかそんな感じだろう。

…頑張れよー、見。

その他にも走り終えた奴らが戻つてきたが先生が何かを言つとすぐ  
に走つていった。

奈々村も戻つてきた。

奈々村も罰かなー。何で考えてたけど、何もしないでこっちに来た。

「奈々村さん、罰は？」

「女子は25分以内ならOKなの」

「なんだ。じゃあ楽だね」

あ〜、それにしても…退屈だ。

授業の後クラスの人達に、皆さんお疲れだね〜、って言つたら地味  
な嫌がらせ（シャー芯飛ばすあれ）を一部の女子（罰を受けずに済  
んだ人達）を除いた人達にやられた。

## ハルソード8 体 育！（後書き）

どーも… 時期外れな風邪を引いた神羅です…

次話では… 狼くんの知り合いが出ます… お楽しみに…（あ… 風邪  
つてキツイ…）

休日み 1-3B

「おい皆あ！転校生が来たぞ！」

男か！？美女か！？」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

卷之三

卷之三

どうやら先週から噂されてた転校生とやらが来たらしい。  
何で転校生でそんなに騒ぐかなあ、とは思ひナビ一度は見てみたい  
なあと思ひ。

うん…人のこと言えんな、俺。  
…と言つことで、今は昼休みだから見に行くか。

昼休み 1-7AS

……おやじのひな。おやじのひな。

…ん？何をやつてるか？

それはな、『質問攻め』だよ。

例えばあれだ、誕生日はいつ？とか、特技は？とか。そんな感じ。んで、もう一つ。

早速非公認F・Jを作ってる。

お、あそこにアイコンタクトで会話してる奴がいるから解読してみようか。

（ええい！会員ナンバー01は俺だ！）

（違う！ナンバー01は俺にこそ相応しい！そもそも始めて天さんの素晴らしい気に気づいたのは俺だ！）

（……お前とは一度、戦わねばならんようだな）

（いいだろ？…かかるて来い！）

（待てよ！ナンバーなんて関係ないだろ！？俺たちは一人の人を守る為に集まつた同士じゃないか！）

（…そうか。そうだよな。だが、それに気づかせててくれた貴方こそナンバー01に相応しいっ！）

（そうだな…。さあナンバー01、俺たちに指令を…）

（…まずは会員を集めるぞ…）

（（イエッサー！）

（そして集めた奴らの中から選りすぐりのメンバーを…）

…まあ、ここまでにしておこうか。うん。

それにしても見えないな…転校生。

まあいいや。めんどいし時間も無いから帰ろ。

おい／＼す。

狼だ。さつきまで前に見つけたいい場所（エピソード5参照）で寝てたんよ。

適度にサボり、適度に授業に出る。それが俺だからな。

ヒュカツ！

「む、矢文？拙者宛か…どれ…」

矢尻に付いていた紙を広げて読み始める先生。  
てか何故に矢文？

「今から強制の職員会議が入った。よつて今日はここまで。後は自習とする」

自習か…ラツキーだ。

「お／＼い狼、転校生の事知つてるか？」

「いや？転校生なんて来たの？」

「ああ、7-Aに一人。片方は女で片方は男、女の方は天つて書くらしい。何て読むのかは知らんけどな」

「へえ、でもよほどの事がない限り関わる事にはならないでしょ。この学校人数多いし」

「そうだな」

「それよりも先輩方と生徒会の勧誘以外に面倒事を増やしたくは／＼

……

「いたああああああああああ…！…！」

「うおつ！あぶなつ！」

「は？」

「ドオオン！」

「げふあつー？」

……つふー。

あぶねーあぶねー。

まさに間一髪つて所だつた。

何があつたかつて？

転校生と思われる生徒一人組みの男の方が  
叫びながら凄まじいスピードで突っ込んで来たんだよ。

で、今は……。

飛び込みが直撃した狼がそのまま吹っ飛んで  
椅子とか机とかぶつとばしながら壁に激突。  
そのまま軽く意識飛んで（死んだか？）俺の視点に……

「ならないよ」

「うおつー？生きとるー？」

生きとるー？つてひでえな……。

こんなんで死んでたまるかよ……。

つーかなんだ？この抱きついて来る意味の分からん奴は……。

現在進行形で頬擦りまでしてくるし……。

「うつわあー！影ちゃん久しづりー！」

「…………影ちゃん？」

「…………影ちゃん？」

{} {} {} {} {} {} {} {} {}

只今、記憶を掘り起こしております

~~~~~

ああ、奴か。つて事はあいつもいるか。

確かに懐かしい奴ではあるけど……俺にタツケル（奴は飛ひ）いたた  
けかもしれんが）を食らわせた罪は 重い!!

喰らええい！必殺のお、ボテイイブロオオオオ！

ベグシツ！

「……おおう……久しぶりなのにこの仕打ち……」

「あつへえ？ おつかいなあ。確かあの時、鳩尾に入ったか力が抜け倒れそうになる奴

三つ取つて来るからね!』とか言つた奴が何でこゝにいるのかなあ

だ  
が  
俺

倒れそよはながた女の頭を抱み上はがり抱ける

「いたいたいた わよ わわ -」

持ち前のスピードを活かし、ラッシュショーラッシュショーラッシュ！  
ある程度殴つたら…強めに上に殴り、高く飛ばす。

「オラア！」

その場で一回転し、後ろ回し蹴りで吹っ飛ばす。

「又ヒヨオオ！」

「ああ～、スッキリした」

「もつとやつても良かつたのに～」

近くから不満そうな声が聞こえてきた。

「こ～の声は…天か。<sup>あめ</sup> おう、久しぶり」

「やあやあ狼くん、お久～」

言いながら抱きついて来る天。

天も抱きついてくるとは…予想外だぜ。

「あ～はいはい、とりあえず離れる」

「やだよ～。十年くらいぶりだもん」

そう言って力を強くする天。

とりあえず放つておくか。

「お～い狼、感動の(?)再開はいいとして後ろの連中はこ～不満の  
ようだが?」

『さあ影月狼！説明をしてもらおうか～』

「誰だ？お前ら」

『我等！天様F・C！さあ、貴様と天様の関係を教えて貰おうか～』

「関係つてそんなたいした関係じゃあり…」

「肉体関係…」

……ん?

何か今ものつそい爆弾発言しなかつた?

『はああああああ～！？』

「いやいやいや～違う！俺と天はそんな関係じゃない！第一ずっと

アメリカに居た天とどうやって肉体関係になるんだよ～！？」

『影月狼…貴様はこの世から屠らねばならんようだな…』

「だから違うつて言つてるだろ！」

「奴を囮めえ！皆あ、殺るぞ！」

偉そうな奴その1

『おおおおおおおおお～』

てめーらちゅうとは人の話を聞けえええ！

『ぐわあああああ！？』

「何事だ！？」 偉 そうな奴その2

『な…何者かがFC会員を蹴散らしながら突き進んできます！』

「ここに皆を失うわけにはいかない…」 偉 そうな奴その3

「全員散れ！ここで戦力を消耗しても意味がない！後日再びあの場所で会おう！同志たちよ！」 その1

『了解！再び、あの場所で！』

そう言い残し、凄い速さで散つてゆくFC会員達。

その奥からは見慣れた人物が現れた。

「後輩？私という女がいながら他の女と肉体関係になつていいというのほんとうは真実か？」

とてつもなく黒いオーラを纏いながら、現れた。

ペーント9 転校生がやつてきた（後書き）

暫く更新できず申し訳ありませんでした

# ペソード10 転校生がやつてきた（後編）

「**真実**なのか？」

とっても黒いオーラを纏いながら先輩が聞いてきた。  
アッハッハ（泣）、どうしよう。

- A 逃げる
- B ラン&アウェイ
- C ハスケープ

うわあ……。

咄嗟に頭に浮かんだ選択肢が逃げる」としないのが自分でも悲しくなつてくる……。  
まあいい、とりあえず逃げなきや。

「どうなんだ？狼」

入り口は先輩がいるしなあ……でも窓は閉まつてて開けてる間に捕まるだろうしなあ……。

覚悟を決めて正面突破しかないか。……見を生贋にして。

「お～い狼？……ん？ 何か嫌な予感が……」  
「すまん見！俺の為の生贋になれ！」  
言つと俺は素早く見の足を払つた。

「うおつ！？」

バランスを崩して転ぶ見。すかさず持ち上げ先輩に投げる！

「おわああああ！」

「！？」

その見の後に隠れながら俺も先輩に近づく。

「クツ！」

先輩が見を受け止める。

その隙を突き、一気に脱出！

「待て後輩！」

「前にも言ったろ！ 待てと言わされて待つ奴はいないつて！」

HAHAHA! 脱出完了!

さて、脱出にも成功した事だし、天と奴の説明でも

奴こと、片翼 翼（男）と片翼 天（女）は一卵性だつたか一卵性だかは忘れたけど双子。  
いや。  
そんで俺の幼馴染：いや、幼稚園の年長の時に翼の親父さんがアメリカに引っ越して別れたつきりだから昔馴染か？まあどっちでもいいや。

で、親父さんとその奥さんが俺ん家のお袋と親父の大親友だそうで、お袋と親父さんは会う度に互いがどれ程強くなつたかを確かめるために戦闘、俺の親父とおばさん（本人の前でおばさんと言うと地獄を見る。いや、マジで）は互いの研究成果を報告しあい（一人とも理系）、報告しあつた物に互いの意見を加えながら怪しい薬品を作つて俺だけに投与する。（翼と天には投与しない）

いやあ、よく生きてたなあ俺…あんな劇物投与されて。（投与された後は大変だった…）何が起こったかは皆様の「想像に

お任せします b.y. 作者)

ちなみに、翼は片翼流かたよくという武術を親父さんに叩き込まれていて、更に豆知識。影月流は速さ重視の流派で片翼流は力重視の流派。

身長とか外見はまた後でな。

次回に良く見てから説明するから。

「今してくれよ」

「おー… おおー…？」

「よひ」

「何でお前がいるんだよ…」

「でりやあ…、と一発顔に拳を。

「お… おふう… 鼻が…。で、何でいるかって言わわれたら…、面白そ  
うだから…」

「死ねえい！」

「おつとおー俺はMじゃないから遠慮するぜー」

並走しながら俺の拳を跳んで避けながら逃つ翼。

何か避けられたことがすげーショックだ…。

「てか面白そうつて何だボケエー。」つむぎは色々と危機なんだよ…！

何かもう色々と…」

「へー、お前はお前で大変そうだな。それよりも言いたかったんだ  
が十年ぶりだつてのに幼馴染の扱い酷くね？」

「それは幼馴染じゃなくともう昔馴染みの領域だろ…」

「いーじゅんーじゅん、それに幼馴染の女子とかつて萌えないか  
？」

…知らん。

「てーか昔馴染の女子とか言つて何かエロくね？」

…どうでもいいわそんなこと。

「おーおい、何か言えつて。それともアレか？無視か？シカトです  
か？シカトなんですか？」

シカトしちゃうんですか…と、にやけながら近づいてくる翼。

そろそろムカついて来たんで黙らせるところ。

「あの時の写真、持つてるんだけどなー」

「うげつ…」

「親父さんに見せちやつてもいいんだけどなー」

「すいません狼さん。どうかお許しを」

軽く脅したらジャンピング土下座で俺の前に着地する翼。

躡いて転んだり立つする…

「邪魔だ！ どけ… て、 しらー！ 何しがみ付いてやがる… キモいんだよー。[印] 真は渡さねえからな…」

「写真ー！ 離せー！

と、 不毛な争いを続けること数分、 後ろから先輩が現れた。

「クツクツクツクツク。 誰だか分からんが後輩を捕まえるとは中々やるな」

「ほり見ろー！ お前が離さないから追いつかれただろー…」

先輩が一步近づいた。

「 まあ 」

また一步近づく。

更に一步。

「 覚悟は」

「 出来たか」

もう一步。

「 後輩？」

先輩は、 にやり、 と笑った。

やつべえ超怖え、 生きてられるかな俺。  
翼ー俺にしがみ付いて震えるくらいだつたらどうかいアホ！

つて、うわああああ！？来たアあああ！

「キシャアアアアアアアアアーー！」

奇声を上げながら飛び掛つてくる先輩。勿論翼にがっかり掴まれている俺は動けない。

「…あ、終わつたな、俺」

ガシツ

「おらてめーらそこまでだ」

予想外の援軍！？

真紅先生最高！

「む…血飛沫先生か…仕方ない、諦めよつ

んむ？血飛沫先生？

「おいこら、誰が血飛沫だ誰が。俺は飛沫だつの」

「あれ？真紅先生じゃないんですか？それと先輩、猫かぶりは？」

「後輩を追つかけてる時にいろんな奴に見られたからもうどうでも

いい」

「真紅は弟。俺は飛沫だ。鮮血 せんけつ 飛沫」

真紅先生って兄弟いたのね。知らんかった。

つーか鮮血が苗字で飛沫が名前つて凶悪な名前だな。

「ほーら、行くぞ夜波。まだ提出していない課題とかその他諸々の提出物が溜まつてるから」「もう…あと少しだつたのに…」

先輩の後ろ襟を掴んでズールズールと引っ張つていく血飛沫先生。  
…よし、いざとなつたら血飛沫先生に頼るか。

「あー、そこの…影用だつて？厄介事持ち込んだら真紅と一人でチヨーク投げ協力奥義食らわせるからな」

「ん、分かつた」

「お？いきなり態度が変わつたじゃねーか。どうした？」

「いや、先輩が猫かぶりしないんなら別に俺もしなくてもいいかと思つただけだ」

「素のまんま話せるのは楽だぞ？後輩

「そーだな」

「そうそう、あの女とお前がそんな関係では無いことくらい分かつてるからな。ただ悪ノリしただけだ」

「だつたらあんな顔で追つて来んな。誰でも逃げるわ

「成る程、私の演技力も中々の物と言つことか」

あ、廊下曲がつて見えなくなつた。

「さて…と」

俺は自分の体に纏わり付いている翼に手をやる。

「ひつーな…なんだ？」

「とりあえず…ぶつ飛ばしてやうつかと思つただけだ」

この後、1・2年塔に男子生徒の悲鳴が響いたのは言つまでも無いことだ。

## ペソード10 転校生がやつてきた（後編）（後書き）

作 ええ、はい、すいません、はい、連載再開です。私用で執筆の時間が取れませんでした。待っていてくれた方（もしいたら、ですが）すいませんでした。

狼 ようし、とりあえず逝つてこいや。な？ 駄作者。作 嫌だ、死にたくないわ。

執筆の時間が取れた時に、感想を軽く見てみたら一件ありました。狂喜乱舞しましたとも。ええ。冥様、本当にありがとうございました。狼 こんな小説に感想を送つてくれて、ありがとうございます。作 では、今後は特に用事も無いのでまたりと更新していきます。それでは、今後ともこの小説を宜しくお願ひします。

# ヒンード11 翼の親父もやつてきた

ふう、今日は無駄に疲れたぜ。さつさと家に入つて寛こう。

学校で翼をボコつた後、普通に授業を受けてやつと我が家へと帰ってきた。

普通に……じやなかつたか。

ホニコた箸なのに何故か復活して色々と仕掛けてくれるもんだから無駄に疲れた。

元二十九

家の前に着陸し、家の鍵を取り出す。  
そして、玄関に鍵を入れる所で気が付いた。

「…開いてる」

何でだ？

この家の鍵を持つてるのは俺とお袋と親父と翼の親父さんだけの筈だ。

……！まさか、帰ってきたのか？

ガチヤ

「おや、お帰りなさい。息子」

「あ…ああ。ただいま、親父」「そんなあからさまに嫌そうな顔しないで下さいよ。それじゃ僕は買い物に行つてきます」

良かった、外出か。

…つてまでよ？今、買い物つて言つたよな？

「待て！何を買つんだ？親父」

「あははっ、普通の食材ですよ。気にしないで下さい」

「そうか…なら、いい」

親父は嘘は吐かないからな。言葉巧みに騙す事はあつてもな。普通のつていつてたし問題ないだろ。

問題は…お袋だ。

あの人は俺の手に負えない。

…逝くしか、無いか。

俺は覚悟を決めて魔窟わがやに入った。

…え？上の文字が違わないかって？いや…あつてる。逝くんだ。そして魔窟わがやだ。

「ただいま

「お～う息子～、おかえり～」

そして無言で自分の部屋に直行しようとする俺。

しかし、その行動は無駄に終わつた。

ええ、捕まりましたとも。

「息子よ、何処へ行くんだ？」

「いやあ…俺、学生だから勉強しようかな～って

「必要無いだろ？さあ特訓だ」

「嫌だ！死ぬ！死んじまう！」

「嫌だ！死ぬ！死んじまう！」

「ハハハハハ！」

「笑うな！」

「アハハハハ！」

「離せ！あと笑うな！」

「行くぞ」

急に真面目な声になり、更には頭を片手（それも利き手じゃない右手で）で軽く掴まれ、空中にブランパンと持ち上げられてしまった。

「行くよな？」

……頭を握る力が段々強くなつていぐ。

「……はい」

と、言うわけで、お袋が帰つて来る度に行われる特訓じゅげんが今回も行われることになった。……はあ……。

「はあ？」

「だから、轟から提案されてな。『たまには翼と狼を入れ替えて特訓してみないか?』って

「で?」

「轟にしごかれとけ」

「ふざけんなあーあの力で殴られたら……『じゃ』……野郎……」

文句言つてゐる間に行きやがつた。……  
後で親父の薬を飯に盛つてやる。

「あれ？ 翠は？」

「どうも親父さん、早かったです。お袋はつこせつと行きましたよ。」

ちなみに翠とはお袋の名前である。影円翠。<sup>すい。</sup>

「遅かったか。俺帰った時翼生きてるか？」

「黒い昆虫並にしぶといから大丈夫だと思いますよ？」

「やうか。よし、じゅうひとと始めるか」

始めますか…と返事をして家に入ろうとした時、親父が帰ってきた。

「おや？ 轟じやないですか。どうしました？」

「おお、狂也か。ちょうどいいあの部屋のパスワードって何だ？」

「ああ、いつも貴方がハニーと戦うあの部屋ですか。」僕は殺しが

だいい好きい”ですよ？”

「何その恐ろしいパスワード…」

「嘘ですよ？」

「で？ 本当のパスワードは？」

「誰のでもいいですから血液を15リットル程です

「もつと怖えよ！」

「冗談はさて置いて…」

「冗談かよ！」

「部屋の前まで行ってください。後は遠隔操作で鍵を開けますから

こうして、俺と親父さんの初特訓が始まった。

数時間が経ちましたとさ

何とか…乗り切つたぜ…。  
けどその代償に体のあちこちが痛てーぜ。

「あつはつは。轟、上手い具合に手加減できますねえ。僕のハー  
ーだつたら毎回骨の何本かは逝つてるんですけど。それじゃ息子、  
今から薬塗りますよ~。打ち身と掠り傷に良く効く薬です。…あ、  
これ食べれるんですね?…どうですか?」

「いるかっ!」

「そうですか。え~い」

ベトオツ!…!

え~い、の掛け声と共に何かが俺の背中に落ちた。  
つーか果てしなく氣色悪い。…ん?

「くあああつ!…痛ててててて!…沁みる…ちよ、痛た…何これ!…?」

「良薬は口に苦し、と言つじやないですか。それと同じです。…

多分」

「多分つ…?」

「狂也、実験はしたのか?」

「フウオオオオオオオオ!」

「いいえ?してませんよ?」

「やつぱりか…。スマンな、狼。我慢してくれ」

「はあつ…はあつ…もう痛くないです、親父さん。それよりも見  
てくださいよ、これ」

「ん?どれどれ…。うね…」(こつは凄いこつな)

痛みが引いたと思つて傷を見ると、傷が治つてゐんじやなかつた。

再生してた。

「…」今まで来ると自分の体でも気持ち悪いね、うん。

しかも良く聞くとな、ウジュウジュ言つてんのよ。やっぱこよ、これ。

「あああ、そんなことは放つておいて早く行きましょう。もう少しで晩御飯が焼きあがる頃ですから。それにハニーも今日はきっと帰らないでしようから轟も食べてついてください」

「ああ、すまないな狂也。それじゃいただくよ」

今日の晩飯はハンバーグのよつだ…。

親父のと親父さんは。

「おい親父、これは何だ？」

「何つてハンバーグじゃないです。形は頑張つてメカ ジラにしてみました」

「そうか…。フンッ！」

キイン！

ナイフを持つて首を一閃してみました。

「ああっ！僕のメカ ジラ……………」

「何で中身もメカなんだよ…ふぞけんなつ…」

「くそつ…」…叩叩、行け！…」

「せいやツ…」

キインキイン！

「――叫と――叫はエ ラと ジラか。上手いな、狂也」「キン ギドラもありますよ？」

「こりちは薬のカプセルが入つてたか…油断ならん親父だ」「こうなつたら…きなさい、量産型ザ！」

「危ねー物をハンバーグで量産すんなー馬鹿親父！」

「はつはつはつはー！そんなことに囚われていたら科学者なんてやつてられませんよー？」

「ふむ、狼。団体様のご到着だぞ？」「うーわー！わっしゃわっしゃいるー！」

「僕の小遣いから出したんでそれで終わりですがね。まあ遊んでたら完全自立思考ができちゃうエエが出来たんでそのザ はかの赤い彗星よりも1・2倍から1・5倍の強さを誇ります」

「遊びでそんな物作るな！全国の開発者さんに謝れ！」

「狂也あ、ハンバーグおかわりしていいかあー？」

「ええ、フライパンにあるのをどうぞー」「俺にもそっちを「駄目です」「うおつ、ザ が襲つてきたつ！？」

「フツフツフ、まあ頑張れ、狼」

「危ねえつーうわつー！」

「あははははは」

こうして、男3人の食事は進んでいった。

## ペソード11 翼の親父もやつてきた（後書き）

作 はい、この話は翼を学校でボコった後の話ですね。何せ同じ日  
ですし。

狼 まさか親父さんが来るとは思わなかつたな。

作 いやいや。折角アメリカから帰らせたんだから出でなきゃね。

狼 だからって親父まで帰らせることは無いだろ？

作 ほらほら、そんな事はいいからおじさん一人の紹介でもしたら？

狼 めんどくせーなあ…。

片翼蟲。かたつばう 翼と天の父親。今現在も身長は伸びていて現在208セン

チ。超マッスル。そしてダンディ。

影月狂也。かげつききょうしゃ 僕の親父。身長、大体180くらい。超絶マッドサイエ  
ンティスト。メガネ。

以上だな。

作 適当だな。詳しく述べは説明しないの？

狼 その辺は読者皆さんに『こんな感じかなー』って考えて貰う。  
作 まあ、基本的にはかつこいいので顔等は皆様の想像にお任せし  
ます。（その内髪の色等は決定します。まあ殆ど決まつますが）  
それでは、今後ともこの小説を御観覧下さい。

## ペソード12 これって告白って奴ですか？

そう、これはとある日の放課後のことだった…

「あの、その…一回見たときから…す、好きでしたっ…良かつたら付き合ってください…お願いします…」

「だつてさ、良かつたな、狼」  
「だつてさ、良かつたな、見」  
「だつてさ、良かつたな、翼」

俺は見に、見は翼に、翼は俺に、完璧に同じタイミングで名前以外のところを同時に言った。

「…うん？」

何でこんなことになつてるんだろう…。 今まつて何かあつたっけなあ…。

（半日前）

「狼？ ビラした？ 返事しろ～」

見が俺に話しかけている。

ああ、そうだ、今日は火曜日。

土日のお袋・親父さんの修行を無事に乗り切つたんだよなあ…。 でもつて猫かぶり無しで月曜に学校いつたら皆すげー驚いてたなあ…。

「ああいや、悪い。もひつ、あまりの疲れで意識が違う世界へ飛んでた」

「何それ？頭大丈夫かお前？」

「つるせーな、お前よりは頭いいよ」

「俺これでも頭いいほうなんだぞ？」

その後も喋りながら午前の授業を終え、見と二人で学食食いに行つたらそこで翼に遭遇した。

「おい～っす、狼、見」

「狼、今何か聞こえたか？」

「空耳じゃないか？少なくとも俺には何も聞こえなかつたし見えなかつた」

「ちょ……」

「気味悪いな、さつわと行こひつ、狼」

「そうだな」

「無視ですか？放置プレイですか？」

「俺さ、最近ポイント無くなり気味だから学食やめて弁当作ろうかとか考えてんだけどうかな？」

「材料費とか出してくれるんなら俺が作らんでもいいぞ」

「…………しくしくしく…………」

「頼みたいんだけどな……ほぼ確実にあの3人に奪われるだろ？なあ……」

「ん？よく聞こえなかつたぞ？」

「…………グスツグスツ…………」

「普通に学食でいいかな」

「そりゃ」

「…………あれ？翼いたの？」

「」

「いたよー。せつきからいたよー。」

そして昼飯ー。

俺は掛け蕎麦、見も掛け蕎麦、翼はざる蕎麦。

俺達はテーブルではなく、調理場に一番近いカウンター席で並んで食っている。

…いや、啜つている。

ズズズー、ズルツズルツ、ズゾゾー

うん。何かいいねー。

特に話すことも無いけれど、俺は今のこういう状況好きだぜ。周りのこと気にしなくてもいいし、居心地もいいしな。

…これで、後ろで暴れている奴らをえいなけりやなー。

「狼君には私のお弁当を食べてもらうのーー！」

「いえ！私のお弁当を食べていただきますから天さんはお一人でどうぞ！」

「奈々村さんこそお一人でどうぞーー！美味しくないお弁当食べて具合悪くなられたら困るからー！」

「何ですかその言い方は！」

「そつちこそ何なんですか！」

ああ、うるせー。

…つてかこんなに仲悪かったのかこいつ等…。

…あ、弁当箱が飛んできた。

「ホイッと

うん。まあ避けるよね。

わざわざ戻たるのも面倒だし。

「せめてキャッチしてやつたら?」

「めんどー!」

「いやめんどー! お前なあ……」

前に向き直つて昼飯をまた食つ。

…もう一個も飛んできたし。何で飛んでくんだよ。

「よシ」

「いやだからキャッチしてやれよ

「それよりもいいのか? 今の、厨房に飛んでいったように見えたぞ

?」

「え? 大丈夫だ……」

「グハアツ! 何だ!? 弁当箱が飛んで来たぞ! ? 誰だあ! 飯を粗末にした奴は!」

「料理長ツ! 落ち着い! ……ちょ! 包丁を投げないで下さ! うわわわわ!」

「知つたことかーー俺は飯を粗末にする奴が大つづつ嫌いなんだあーーー!」

「ちよつとリコーアリチョーー! ?」

「副料理長! 何とかして下せー!」

「スウ……( 煙草吸つてます) フウ……( 煙吐き出しました)

… そうなつたら俺には止められん、暴れさせとけ」

「え? ……?」

「ウガア————!」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…うん、大丈夫だ。  
きつと大丈夫だ。」

「アレでも大丈夫と言えるか？」

「天は既に逃げてるぞ。我が妹ながら、中々の判断力じやないか」「よし！囮作戦だ！翼を生贊にして俺と見が逃げる！以上！」

「おう、分かつた！」

「おう、わかつ…つてフザケンナあーー！」

「やかましいつ！逝つて来いやあつ！」

オラアツツと蹴りを入れて厨房の方に飛ばす。

そし て 逃 げ る ！

「ツー！飯粗末にしたのテメーかあああ！」

「おわつ！？中華包丁はやめれ！つてか犯人はあそこで走つてるチ  
ビともう一人だ！俺じやない！」

チビ！？…チビ？

チビだとおー？

「テメー誰がチビだボケこらああああー！」

振り向いて飛び蹴りを放つ。（3割くらいの力で）

「甘いわボケチビがあああー！」

見事に片手で足を掴まれちまつたぜ…。

しへじつた。

「おこおつせん、月見そば一つくれ」

「おつ飛沫の旦那！いい所に！あの逃げる奴をとつ捕まえてくれ！この3人に俺の裁きを『えなきや気が済まん！』

「あ、真紅のクラスの…名前なんだつけ？忘れた。まあいい、捕まえるから一週間飯奢れよ、おつせん」

おつよ、と料理長が言つてゐる間に何処からかチョークを取り出す  
血飛沫先生。

…なんでチョーク持つてんの？私物？

「そりつ。…爆ぜろ」

向こいつでパーン、と快音が響いた。  
それと同時に、見が飛んできた。

「ぐえつ」

「あ、おかえり」

「クククククツ…ああ、捌かれるのと卸されるのと潰されるの、ど  
れがいいか選ばせてやろう！さあ選べ！」

「こらこらおつせん、捌くな卸すな潰すな。後処理が面倒だ、特に  
血痕とかな…最近のルミノール反応薬とかマジすげーからよ。せ  
めて雑用させるへりいで許しとけ」

心配する所そいつ…？  
ルミノールとか言わないで！？

まあ、俺と翼は逃げれるんだけど見がな。

「旦那、処理なら俺がやるんで大丈♂」「待て」「」

「スウ……（煙草吸つてます）フウ……（煙吐き出しました）  
時期的にちょうど良い頃だろう。明日明後日にはメニューが全て  
中華に変わるからな。中華鍋や調味料の運搬をやらせとけ。後はま  
あ、食器の片付けとかで良いだろ」「う」

「そうつすよねえ。料理長の場合…『ハツハツハツハツハ…！秘技！  
300枚卸！』とか言つて、そりやーもう人肉の生き造りみたいな  
状態になるでしょーし」

「やつぱり副料理長は常識人ですね」

「スウ…（煙草を以下略）フウ…（全略）

まあ、そういうわけだ。放課後に…ん？中華用の調理器具は何処  
だつたつけ？…ああ、思い出した。一・二年塔の倉庫にある筈だそ  
こから道具を運んできてくれればいい。以上だ、なあ料理長？

「……納得いかん」

「以上だ、なあ料理長？」

「納得いく」

「以上だ、なあ料理長？」

「……分かつた分かつた。それでいいよ、もう「

「そういうことだ。じゃあ放課後にまた来てくれ」

そして放課後、俺達3人は厨房の前に行つた。

「このメモに書いてある物を持つてくるだけだからな、頼んだ」

「どれどれ…？」

『雑用リスト

中華鍋 × 20  
中華鍋（大） × 15  
中華鍋（小） × 25  
豆板醤（大瓶） × 50  
コチュジャン（大瓶） × 50  
テンメンジャン（大瓶） × 50  
etc . . .』

「.....」

「何で無言で俺の方見んの！？」  
「いやだつてお前バカ力じyan」  
「それと見！お前そのロープどつから出したんだよー？やめて怖い  
から！」  
「三次元ポケットから出しただけだが？」  
「割と普通の答えが返ってきた！？」  
「ほーら行くぞー」  
「お前達雑用やる氣ないだろー？」  
「当たり前だ」

そんなわけで今の状態になつてゐるわけだ、うん。  
ちなみに今は倉庫の一歩手前にいるわけだ。

いやホントどつなかつてゐるんだろう？

次回に続かない。

【いやいや、続きます b y 作者】

## ヒュソード12 これって告白って奴ですか？（後書き）

作 どうもです。お久しぶりです

狼 何挨拶かましてんだこの野郎は

作 久しぶりだから？

狼 どうでもいいわ、ボケ。つーか何だよあの料理長。危なすぎる  
だろ

作 うん？あの学校は時期で料理人変わるからね。個人的に副料理長が好き

狼 ああ、あの渋いオッサンか。確かに外見もカッコよかつたな。  
つて違う！冒頭のアレは何だ！

作 何って告白？

狼 アレはビュッやつて処分するんだよ！

作 君の気合で？

狼 何で疑問系なんだよ！

作 と、言つわけで次回も狼君が頑張ります。次話はわりと早めに  
書けると思います

狼 精霊の方に力入れ過ぎなんだよテーマはよ

作 良いじゃん、真面目に書いてるんだから。それではまた次回！

「あー、その、その告白は誰に對してなんだ？」

見と翼の代表として俺が聞いてみた。

「み……皆さんですっ！」

いやいや、皆わんつて、おい…。

（こちら狼。見、翼、伝わってるか？）

（ん、ああ、大丈夫）

（俺も大丈夫）

俺達は瞬時に会話を始めた。

そーだな……議題は『どうするよ、これ』

（で、この状況どうするよ。あの子は俺達が好きだそつだが）

（つーか、達ってなにさ、達って）

（間違いなく俺、翼、狼の俺達だろ？）

（俺は断るけど、お前らは？）

（俺も）。達って辺りが気に入らない）

（俺もだ。今はまだそんな余裕ないしな）

（じゃ、断るか）

（任せたぜ！）

（頼んだ）

「悪いけど俺達はお断りだ。じゃ、仕事があるからそりどこてくれ

「そうですか…。お時間とらせてスイマセンでした」

「やつこいつど、あの子は何処かに去つて行つた。

「よし、やつやと運んで帰りつけせ」

「了解」

「運ぶのは俺だけだな……」

「分かってるじゃん」

「……お前何時が全力でぶん殴つてやる」

「ほり狼、鍵」

見からポーンつてな感じで鍵が飛んできた。  
俺はそれを見ないで受け取ると…

「鍵多ッ！？」

余りの鍵の多さに吃驚した。

「そこにある鍵だけで全部の鍵が開くらしいからな」

「どれが本物なんだよ」

「そ、んなん関係ねえつて。こんなもん適当に差し込め……」

「ボン、ドギヤアアンッ！」

「……ば？」

俺の横から鍵を取つた翼が適当に鍵を差し込んだ瞬間、鎖付きトゲ付き鉄球…いわゆる『モーニングスター』つてやつ（？）が倉庫の扉の奥から飛んできた。…あ、扉閉まった。

「適当にやるとやつなるべ。確か本物は58番か59番か57番だった気がする」

「そういうことは早く言ええええええ！」

「いや、翼だつたしいいかな」つて…

「よかねえよ！」

「どうあれ、やれども、おまえの心配は、心配だよ。」

俺は翼から鍵を取り返す。どれにしよーかなー。

これだ！57番！

「開けえッ！」

開いたか！？

「そういうん、構ええツ！」

ジャキジャキジャキジャキジャキジャキ

「撃て！」

「ウニ、エニ、セニ」

何か出てきて、しかも撃つてきたし。  
だがまだ甘いな！避けきつてくれる！

「クッ！撃ち方やめー！総員、直ちに扉を封鎖せよ！伍長、手榴弾

「アーティスト」を探しに

「サー・イエッサー！」 × 7

転がってきた手榴弾を後ろに飛んで回避し、回避終了つと。

「相変わらず何でもありかお前は」と

弾をよく鳴れ工謹で出来たN?」

「力運起用」せぬといふ前も何でもあり

「どうでもいいけれど、俺達開けたから次お前だな

「そうそう、俺達だけってのも不公平だしな~」

[ 10 ]

ほらよ、と鍵を見に渡して後ろに下がる。

「残りは58と59…。確立は50%か…。悩んでも駄目だ！59番で行く！」

叫んで鍵を入れる見。

「ଶବ୍ଦାଳ୍ପିନୀ କଥା କଥା କଥା କଥା

そして、すぐさま扉を閉めた。

「まあまあ

「おい、見、どつたの？」

卷之三

が、アーティストが入ったのではなーでしょうか

「そうですねえ、狼さん。普段は冷静な見があそこまで取り乱すとは…。一体何が出てきたんでしょうねえ」

（ボソボソと何か呟いている）

「狼さん狼さん、どうとう頭抱えて体育座りし始めましたよ?」

「しかも何か呑んでるようですねえ。もうこれは放置の方向で行

၁၀၁၁

さてさて、廊下の隅っこの方で何か呟いてる見はほつといて、仕事終わらせよっ♪

「おし、58番で開いたぞ。翼、出番」「へへへ、やりやあ良いんだろやつやあ

「スウ……フウ……  
まさか一回で全部持つてくれるとはな……。」苦勞様。  
「どうだ? 折角  
だ、何か食うか?」

場所は変わって厨房前。

荷物を全て翼に括り付けて運んできた。

余りの重さに耐えられなくて廊下に翼の足跡残してきたけど、まあそれは『え、何やつてんの?』的な目で見てた校長が埋めといてくれるだろ。きっと。

「早く帰りた」

「俺マーボー！マーボー！麻婆！あ、マーボーでも麻婆茄子の方ね  
！激辛激辛！いや寧ろ超辛で！」

「うるさいわボケエ！  
「ピひやン！」

マー ボー マー ボー うるさいわ!

じゅうとら早く帰りてえんだよ！

それよりセイボーは麻婆豆腐だら!!!! (これ重要)

「ぐふう……まさかのレバーブローですか……」

早く帰れせ 館作ひないとお袋に糸されまへ

前回ハたゞ?料理で戦争を止めたとかつて

「あの馬鹿夫婦は何やつてんだよもう…………」

てもお前で研がおはさんで這が  
かが空 なりヌヌ元がんじ

「お袋は他人に見られてるとか気にしないから影月の力使いまくる

しな

「はい、お待ちどう様です。麻婆茄子、辛さレベルMAX、アルテ

「だからつるせえツつてんのー

ペナシッ！？

あーもー、ほんとうねこ。

今度は後ろからひん殴りでやった

だ  
し。

「ぐうむむむむむー田がー田があああー?田に茄子があああー。」  
「畠しこつひんだりおおおー。」

「ククク……」

「副リヨーリチヨーが笑つた！？」

「ツ！ 今お前が見た物は即刻記憶から消せ。 消さないと俺がお前を

1

！？「いいいいいいいいいいいいいいいやああああああああああああああ

と、言つわけでも告白はそれほど重要な事ではありませんでした。

だつたらサブタイにすんなアホ作者。

おや？期待してたのかな？

狼するか。興味もないしじつでも良い。つーか最近女と関わるとろくな田にあわないからな。

作まあ、基本的に女性の方が強い設定だからね。

狼最近先輩と姉貴がパワーアップしているとの噂を聞いたんだが？

…！…な、何のことだかさっぱりだよ。

狼してるんだな。まあ、それはいいとしてまた次回な。

作次回は狼君と翼が実力の片鱗を見せます。お楽しみに。

狼文才無い + 戦闘描写下手、だからあまり期待しないよーにな

ちなみに感想は隨時受付中だぞ！

## Hペソード14 何か知らんが襲われた

「なあ翼」

「なんだ～？」

「」は学園の中庭。

今日の授業も終わったし、今は翼と一人でまたりしてゐ所だ。ちなみに見はまだトラウマ入つてゐる。

「俺、よく生きてられたよな」

「そういうや、おばさんに國中追い掛け回されたんだっけか。お疲れ」「あたさあ…どうでもいいけどさ」

「どうたのよ～？」

「視られてるよな」

「ああ、あの木の裏に一人いるな。それに、授業中とか遊びに行つたけどお前ずっと見られてたもんな」

「つむ。つーかお前、授業はちゃんと自分のクラスで受けろ。毎回俺等のクラスに来るな、邪魔だし」

そう、何かよく分からんが俺、今日は誰か…つーか木の裏の奴に監視されてるらしい。

「何かむかつくなあ」

「お前なら撒けるだる」

「ううだけどよ、あいつ一般人じゃないぜ?」

「適当に相手してあしらえればいいんじゃねーの?まあ頑張れや。じや、俺麻婆茄子食つて帰るから」

「茄子じゃなくて豆腐だろそこは。まあいい、じや あな」

翼は食堂に向かつていった。

茄子で食中毒になつて悶え苦しむがいいわ！  
わてわて。

「そこの人、出てきたら？」

「何だ、気付いてたのか」

「そりや気付くだろ。で、何の用？」

「俺は家系で陰陽師やつてんだよ。で、お前からそういう氣を感じた」

「へえ、そりやどうも」

「面倒事は嫌いなんだが、一人前になれば家の馬鹿みたいな修行も終わるからな。お前を祓つて一人前として認めてもう。そういうわけだから」

ここまで言つて自称・陰陽師の男は札を取り出した。

「死んでくれ。式神！」

「はあ…話が飛び過ぎだろ」

男が式神つつた瞬間、一メートル位の傀儡人形くぐつみたいなのが手に持つた刀で襲つてきた。

つていうか本物の陰陽師さんでしたか。

「よつと」

「あれを避けるか！？流石妖怪…」

ありやま、見事に勘違ひしてゐみたいだ。

「まあ聞けつて」

「つるさい！行け、式神！」

人形が後ろから切りかかってくる。  
俺はそれを体を捻るだけで避ける。

「俺は普通の人間だぞ？」

「なら何でそんな氣を持っている！？」

今度は赤い札を取り出して投げてきた。

陰陽道とか五行からして火だろ？

恐らくは…爆発か何か。

「そんなもん生まれつきとしか言ひよつが無いだろ」

札が近づいてくる。

その場から跳んで樹の上に乗つて避ける。

人形が追いつき、下から突いてくる。

それも冷静に見極めて樹の幹を左右に移動することで避けきる。

「大体お前、自分が修行やりたくないだけで人殺そうとすんなつて  
「黙れ！」

人の話聞けよこの野郎…。

「俺はただ自由が欲しいだけだ！あんな家なんかどうでも良い！」

「いや、そんな話俺にされてもどーしょーもないし」

「だから早くお前を祓つて一人前だつて認めてもらうんだ！」

懲りもせずに赤い札を投げてくる。

つて解説してる今も後ろで人形が切りかかってきてるんだよな。

眞面目に解説すんのも飽きたし、終わらせるか。

「なあ、剣道の突きつて凄えよな

「何を…」

反論してきたが無視だ。

めんどくさい。

「あの技、高校生以上の経験者にしか使っちゃいけないんだぜ？」

人形を蹴り飛ばし、距離を取る。

「そんな経験者でもたつた一発で死ぬことがある、真剣でも無いのに、だ。何故か分かるか？」

十分に距離を取った辺りで人形に向き直る。

「し、知るかそんなこと…」

「ひつひつこと、だ」

パンー！

一瞬で距離を詰め、腕を前に突き出す。

俺がたつた今突いた人形は、文字通りバラバラになった。

その破片の中の頭だった部分が札になり、その札は空中で燃え尽きた。

…ちなみに、今のは影月の技じゃない。ただの突き、だ。

「なッ！？」

「あーダリー…。じゃあな陰陽師さん。俺、帰る。飯作らないといけないんで」

それにして…今日の晩飯は何にするかねえ。  
久しぶりに餃子でも作ってみるかな。

「おーい、狼おー。終わった？」「

「ああ、今さつき終わらせた所。ほれ、帰るぞ」「

…ん？冷蔵庫に大蒜あつたつけ？

「式神！」

陰陽師さんはもう一体の人形を出して襲ってきた。  
まあ、話にならんくらい弱いから関係ないか。

「何だ、駄目駄目じやんあいつ」

「あ、翼もそう思うか？実際、弱かつたし」

「ベゴオオン！」

あちゃー。

翼の奴、裏拳一発でやつちやつたよ。

後ろを見もしないで放った翼の裏拳が人形の顔面にHITした。  
人形はきりもみ回転しながら陰陽師さんの方に飛んでいく。

「へふうー。」

あ、巻き込まれてやんのー。ばっかでー。

「おいおい、巻き込まれて気絶したぞあいつ。どうすんの？」

「放つとけば起きるつて。本氣でやつたわけじゃないんだし」

「当たり前だ。お前が本氣でやつてたらあんなもん壊れて破片になる所が粉々になつて霧散しちまうだろうが」

「お前だつてそーだろ？」

「俺は本氣出さないの。出すよつた相手なんてお袋達以外には異世界にしかいなだらーし」

「異世界？どこそれ」

「馬鹿作…じゃない。」この世界の神が何時も読んでいる世界。何か感想はまだ送つてないらしいけど

「読んでる？感想？送る？」

「まあ気にすんなつて」

「氣になルううううう！」

つて叫んでたけどほつといつぱ。だつて翼だし。

## Hピソード14 何か知らんが襲われた（後書き）

狼 おい、馬鹿作者。俺剣道知らんぞ。知つてるのは突きが何故強いか、だけだ。

作 あー、いいのいいの。突きが強いつていうイメージを読者様が持つてくれればいいな、って思つただけだから。

狼 …にしても、あいつ弱かつたなあ。

作 もう一度と出でこないしねえ。

狼 何かかわいそうだな…。もうちょっと戦つても良かつたか。

作 いーのいーの。何か戦わせたくなつただけだから。

狼 だつたらもつと強い奴してくれ。アレは弱すぎる

作 うーん…。いつそのこと賄賂贈つて他の先生方に『うちの狼を

宜しくお願ひします』って頼んであげようか？

狼 いや…あの兄ちゃん達はちつと…。俺魔法とか氣とか使えないし…。

作 今度機会があつたら（コメティクロスの企画は話数が少なかつたので参加してません。次があつたら参加してみたいです）お願ひしてみよう…。おつと、長くなりましたね、それでは、また次話で会いましょう。

狼 またなあ。馬鹿作者が感想に餓え始めたから送つてやつてくれるとパワーUPするかもな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2621e/>

---

学校は空の上！？

2010年10月10日17時30分発行